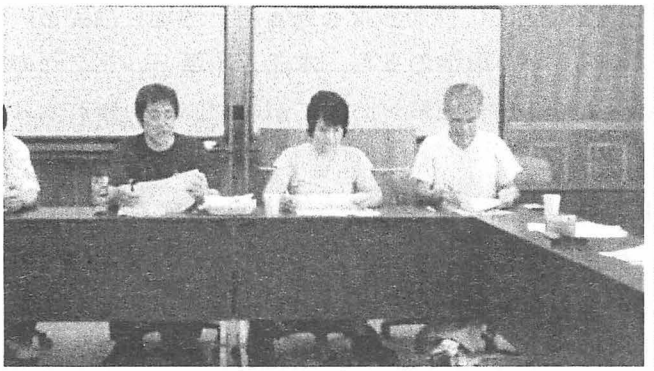
琉球大学
University of the Ryukyus

Title	第２回：南風原町の小中学校と地域の連携について
Author(s)	-
Citation	地域にとって学校とは・学校にとって地域とは？－地域再生と教育再生の相互作用－: 25-57
Issue Date	2012-02-23
URL	http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/25797
Rights	

琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

第２回：南風原町の小中学校と地域の連携について

と　き：平成 23 年 6 月 11 日（土）10：00～12：00
場　所：琉球大学　文系総合研究棟 703
対象者：仲村　稔氏（前南風原町立翔南小学校校長）
　　儀間　千恵氏（地域コーディネーター（南風原中学校区））
　　大宜見　洋文氏（南風原町立南星中学校 PTA 会長、南風原町立翔南小学校 PTA 賛助会員）
調査員：11 名（島袋純、佐藤学、新垣光栄、嘉数学、照屋勉、濱里正史、前城充、宮地順子、宮里大八、糸数温子、中村任子）



▲左から大宜見氏、儀間氏、仲村氏

▲聴き取りの様子

（敬省略）

前　城：大宜見洋文さんは２年前に翔南小学校の PTA を卒業して、今は翔南小学校賛助会員という形を取って関わってもらっています。南星中の PTA 会長を４月からやってもらっています。我々が翔南小でやりたかったこと、これを洋文さんの報告から聞いてもらえればと思います。

ちょうど私たちが PTA 役員に入った頃、お隣の仲村稔先生が校長として翔南小に赴任してきました。本当にタイミングがよかったです。我々がやろうとしていることと、校長先生がやろうとしていることが上手く噛み合ったわけです。素晴らしい４年間を過ごさせていただきました。

その事例も報告していただくと同時に、また儀間千恵さんのほうは、「南風原町学校支援地域本部」の中学校区ごとに１人ずつコーディネーターが配置されていまして、千恵さんは、我々とは違う校区ですが、南風原中学校校区のコーディネーターさんです。何の縁か分かりませんが、この地域コーディネーター本部を推進したときの担当が千恵さんの旦那さんでした。県庁の職員で教育部のほうで担当していました。今は異動になっていますけど、そういう関係で、千恵さんは字（あざ）宮平という人口が 5,000 人くらいの大きい地域で PTA 支部長と子ども会長をやっていました。公民館で地域のいろんな方を支援し、地域にもどっぷり使っている方です。地域の人をよく知っていて、つなぎ合わせることに関しては色んな情報を持っており、コーディネーターとしては適任です。それも踏まえて、南風原中学校が字生徒会というのを作った事例も知っていますので、そのあたりも順番よく、洋文さん、仲村先生、そして千恵さんというふうに話をお願いしたいと思います。それでは、宜しくお願いします。

大宜見：皆さん、おはようございます。前城さんにも補足していただきながら報告したいと思います。

まず、資料２種類あります。ペラのやつが翔南小の PTA の入会式のときに保護者に配って、翔南小学校の保護者はこういうふうに成り立っていますよ、地域も先生も関わっているんですよ、あなたもこの中に入っているんですよ、という認識も持ってもらって、これから子育てにこういうふうなつながりを持って関わりましょうという意識付けで、分かりやすい図で説明しています。

この図からいくと先ほど前城さんが言ってくれたように、僕は今 PTA 賛助会員という立場と、それプラス、バスケットの保護者でもありましたから OB という立場でもあります。こういうふうに人が動いているんだということを意識して報告したいと思います。

南風原町立翔南小学校は創立 20 周年を迎えました。古くからある農村集落の旧字と呼ばれる区が５つに、30 数年前に県が開発した建売分譲団地と 10 棟からなる県営第一団地自治会という２つの自治会を加え、７つの区・自治会が校区です。旧字のうち、本部と照屋という２つの字に集合住宅の建設が増え、人口流入も多く、自治会加入率がだいぶ下がっている課題もあります。

「ノウハウのない子育て」：僕も 18 年前に結婚して引っ越してきて、第一団地に住み始めました。その頃に子育ても始めたんですけど、仕事に便利ということと、しがらみがなく生活が便利だという選択で、故郷を離れた核家族での暮らしを始めましたが、その弊害が子育てに影響してきていると実感しました。知り合いがいないことで、交流が出来ずに子育ての情報もないと。親が一緒に住んでないものですから、なかなかそういうのもストレスになっていたと。それから、地域に関わるきっかけとなったのが保育園です。ちょうどこの頃から、公園デビューという言葉もマスコミなんかでも流行り始めたころでした。そういう風に同じように子育てで悩む保護者が増えているということと、DV やネグレクト、モンスターペアレントなどの学校を取り巻く課題の増加がこの頃から言われるようになっていたと思います。

「地域の大切さを知る PTA 活動」：小学校保護者の義務として、最初の頃は仕事が忙しかったというのもありますけど、嫌々ながら PTA 活動に関わり始めました。これに関わるとどっぷり浸かってしまうという忌避感みたいのがあったんですけど、保育園で出会った園長や先生方、先輩保護者とのつながりで渋々ながら関わり始めました。不審者情報が増え、誘拐未遂事件発生の衝撃、情報網の未整備の不安が当時大きな課題でした。これらの事件について知ったのが半年後という、情報の届かない危機感を感じて、自分が関わっていかないとまずいなと思った頃に、ちょうど団地自治会の支部の PTA 会長という立場になりました。そういうことで、地域と関わり始め、子供たちにとっても、安全・安心な生活が一番大切なんだとの気づきがありました。自分の子どもはバスケットをしていたので、放課後に居場所はあったんですが、そのときに野球やバスケット、サッカーなどに関われていない子どもたちの放課後の地域漂流や、そういう状況で悪さをしても直接叱れない周りの環境、だから学校に通報という、地域のつながりが薄れている危機感。だからこそ、地域がつながる必要があるんだと気づきました。

次に、PTA 活動に無関心な保護者の多さ。関わっている親はずっと関わっている。けれど、関わらない親は全く関わらない。この原因はなんだろう？と。敷居が高い？会議が長い？嫌々ながらやらされる負担感？理由を探せばいっぱいあるんですが、自分も最初はそうだったと思

っています。そういう人たちの課題を解決するには、関わり方への意識を変える、楽しみ方を探す活動、会議の持ち方の改善などでPTAのイメージを変える必要があるなと、ポジティブに考えることや、少しずつ小さな成功体験を増やしていくことが次のステップになることも学びました。それはさっきも言ったように、保育園で出会った園長や先生方、先輩保護者とのつながりのお陰。無理には誘わない、出来る時にやろう。「でも、今しかないよ！子供たちと関われるのは！」の殺し文句は親業先輩たちからの貴重な教えだと思っています。

「南風原町第四次総合計画策定の住民会議での学び」：第四次総計の住民会議で、話し合いのルール、意見の言いやすい場の作り方、批判への対応の仕方など、ファシリテーションを学んだことが、その後の自治会運営、PTAでの会議進行に役に立っています。住民会議・教育部会では、教育現場の課題を調べる中で、授業以外の報告書の多さで、肝心の子どもたちに向き合う時間が少なくなる弊害や、保護者とのコミュニケーション不足からのトラブル、ネグレクトの児童生徒の生活補助など、授業以外に教師の抱える様々な問題を知りました。一方で、保護者も、景気悪化による競争激化での残業増加など日常生活に疲弊している状況です。

「子供たちの教育への地域の影響力」：両者の問題を解決するには、第三者の立場の住民、子育てを終え時間にゆとりのある世代や、若者など地域の力が必要であることを実感しました。更に、子どもたちの生きる力を伸ばすには、地域教育で学童の子どもたちを育てている、南風原町津嘉山の山本さんの学童での事例や、和田中学校の学校支援地域本部事業などから、ナナメの関係が非常に有効である事を学びました。親と子、先生と生徒と言うように、上下の関係で溜まるストレスを上手く和らげて、しかも、子どもたちのあこがれの対象や身近な目標となり、向上心をアップさせる効果があるのは、ナナメの関係。それが地域の力。これこそが、一番お金も掛からないのに、それが出来ない原因は、住民が、お互い同士知りあえていない状況。地域がつながっていないことにあると思います。

「自治会加入率の低下」：帰属意識のない住民は、自治会に対しマイナスのイメージがあり、一方、自治会側には、最初から加入は無理だと決めつけて、最初から諦めて関わるきっかけさえも見つけきれていない状況です。住民会議でも、そこを何とかしなければいけないという課題が挙がっていました。区長・自治会長も毎年課題に挙げています。

「地域自治会デビューで実践を始める」：自分の経験から、第四次総計の住民会議で学んだ地域の大切さに心を改めて、自治会に関わり始めました。PTA活動をしながら、自治会長として自治会運営もやる。どうせどちらも同じステージで、行事もほぼ重なるからと無謀な考えだったかもしれません。しかし、両方の立場で関われることで、連携を強めることが出来るのではないかとの思いがありました。自治会活動に熱心な先輩に、PTA活動し始めてから地域に関わり始めた方々が多いことを知りました。それってPTA活動が、自治会加入を増やす素晴らしい機会なんじゃないかな？と思います。自治会加入へのきっかけについては、青年会でも似たような事例があると聞きました。町体協行事の野球、バスケット、バレーなどの大会への参加が、その地域に転入して来た若者が地域に関わるきっかけになっているらしいのです。そこから地域行事への参加につなげるケースもあるそうで、体協のスポーツ行事もそういう効果をもっと広くアピールすればいいのではないかなと思いました。また、自治会長になって、他の自治会の問題について深刻な状況も感じました。伝統行事、毎年恒例行事への負担感や人材不足から

新しい事業を展開するエネルギーがない。組織が金属疲労を起こしている状況。

それらを解決するための鍵が、地域で育つ児童生徒の存在。

「地域再生への子供たちの影響力」:「リトルティーチャー」いわゆる、子どもたちが学校や地域で学んだこと、例えば宇栄原小学校の事例で環境問題でのエコバッグの普及、節水、節電など学校で学んだことを家庭で実践し、それによって親の意識が変わり、改善していく事例がある事を知りました。学校が親を変える事が出来るかもしれない。さらに、地域の人々がボランティアで学校に関わり、子どもたちと親しくなり、その影響が、地域での挨拶、コミュニケーションにつながり、遠くの孫より近くの他人の子の方とのつながりが強くなったりして、子どもたちとの関わりが生活に張り合いを持たせ、生きがいへと意識が変る効果も生まれています。御所南小学校の竹内校長は、地域への帰属意識と呼んでいました。こういう素晴らしい事例を区長・自治会長も知ってほしいと思います。竹内校長の話から、とても粘り強く丁寧に伝えた様に感じました。そして、子どもたちを介して、地域住民と保護者が共通の話題を持つことができて、交流が盛んになり、自治会活動への参加が増える効果もあるとのことでした。その成果が御所南小学校のコミュニティスクールです。毎月 150 名の自治会長はじめ地域住民、保護者、先生方が集まり活動報告、意見交換して活気に溢れています。

「地域行事の意味・文化の継承、次を担う子どもたち」:今まで、近所付き合いが難儀だとか、もっと気楽に楽しめる娯楽がいっぱいあるとの意識で敬遠していた地域行事が、本来は、戦争や天災など、いざという時の災害の危機に備えるために必要で、住民が安心・安全に暮らすためにも大切なコミュニケーションの機会だということに気づくこと、その行事が残っている地域である事を誇れる、帰属意識をもつことが、将来その地域を支える人材を育てるために一番大切なんだと思います。今一度、みんなに気づかせるにはどうするべきかと思っています。

学校が地域と連携することで、気づかせること、帰属意識を持たせる事が可能である事は先に述べました。

御所南小学校のコミュニティ・スクールでは、学校内外で地域住民を積極的に子どもたちと関わらせる事によって、子どもたちは、ナナメの関係の人たちとコミュニケーションの機会を増やし、物怖じしない、たくましい子どもたちに変わります。地域住民とのコミュニケーションで得られる気づきの効果は、学校の教師が授業での課題解決につなげることで、子どもたちの読解力を高める効果を生む。それによって学力が向上し、PISA 型の学力テスト B 問題でも高い得点が出る、と素晴らしい結果が出ています。が、しかし、学力向上を一番の目標にしている訳ではありません。地域に必要な人材を育てるためという最終目標、そのために地域の人々といろんな場面で関わり、コミュニケーション能力を磨き、その副産物（相乗効果とでもいうのかな？）として、学力が向上したと捉えているのが御所南小学校です。

そして私たちも、第四次総計の際に、南風原町で 10 年後どういう大人になって欲しいか、将来、南風原町に必要な人材を育てたいと考え、やはり、地域の課題と子どもたちの教育は連動していること、その解決には、地域住民が学校で子どもたちと関わる事業展開が必要であることを学び、PTA 賛助会員制度を導入しました。芸術家、クラウンパフォーマー、いろんな技術を持った地域住民と子どもたちをつなぐことで、地域の安心・安全につなげ、コミュニケーション能力を伸ばす為の事業展開をしています。そして、それをもっと深化させるためには、地

域力に理解があって、積極的に出向いてくれる教師が必要であることを実感しています。

昨年までの５年間は、たまたま偶然か、私たちと意識がぴったり合った素晴らしい仲村校長の元では、PTA の連携が上手く取れて、地域力を活かした教育環境が整ってきていると思います。昨年は特に、四年生の教師と保護者との連携が素晴らしく、総合学習の時間に保護者、賛助会員と教師が一つのテーマで質の高い授業を成功させています。ただ、どんなに素晴らしい教員でも、数年後には人事異動で転出しなければなりません。過去の経験からも、地域力に理解のある教師になかなか来てもらえない状況も考えられます。であれば、我々住民が自ら採用出来る様にする、町立学校に人事権を移管してもらえるような、例えば教育特区としての南風原町の可能性や学校運営協議会制度導入なども視野に入れながら、保護者、地域住民として勉強しているところです。しかし、いくら学校運営協議会制度を導入できたとしても、翔南小学校で教師をしたいと思って応募してくれる教師がいなければ意味がありません。是非翔南小学校で教師をしたいと思える環境が整っていなければ来てもらえない。素晴らしい小学校だと周りから認められるように、保護者、地域が一生懸命に学校を支え、教師が授業に集中出来る態勢がとれるように頑張らなければいけません。

御所南小学校も、地域住民と連携が密になったおかげで、授業以外に教師に掛かる負担はほとんどなくなったそうです。安心して授業に臨める事に非常に感謝していると校長もおっしゃっていました。教師の側にも、こういうメリットがなかなか理解されない方がいるのが残念ですね。それから、御所南小学校と高倉小学校、御池中学校が進めている小中一貫校も、最初は、中一ギャップという課題解決のために、小中が保護者、地域住民、学校の三者の協力で連携を進める中で、ナナメの関係が素晴らしい効果を生んでいる事と新校舎に６年生の教室が出来たこと、ソフトとハードの両方が上手く合致し一貫校で行ったほうが良いということで、現在の小中一貫への流れにつながったとのこと。我が南星中学校区も２小１中で３年前から校長・教頭・教務主任と保護者の三役が集まり、各学期に一度情報交換の場を持ち、連携を始めました。レベルはまだまだですが、課題解決に向け、少しずつ行動しているところです。

以下は蛇足になりますが、実際に、人事採用権まで持てる学校運営協議会制度を知り、藤原和博校長の講演や、御所南小学校の視察で、学校運営、教室運営について生の校長の話を聴き、調べ始めると、まだまだ知らないことがいっぱいです。小学校での教員配置の学年比重（という表現があるかは分かりませんが）とか、地域との連携強化のために、副教頭職、主幹教諭職等を置ける事が出来る等。しかし、これらについての権限は沖縄県においては、県教育委員会にあります。南風原町が学校支援地域本部事業を更に進めるとしたら、副教頭職あるいは主幹教諭の設置もしくは、その代わりにコーディネーター増員やその職務への権限を強化する必要も出てくるのではないか？

南風原町に必要な人を育てるためには、御所南小学校の様に、単学校に人事採用への裁量権も含めて権限を移管できるのかどうかも、これからもっと多くの住民に先進事例の情報を提供し、町民みんなが理解を深め、地域に必要な人材を育てるために意識を高めていく必要がある訳で、これは、少しずつ地道な活動で賛同者を増やしていくしかないと思っています。

前　城：大宜見さん、ありがとうございます。一番大事なポイントはここなんですよ。大宜見さんと私で取り組んできたPTA活動がどこに端を発しているかというと、総合計画を作った市民性教育

の議論の中から出てきているんです。２つポイントがあります。その総合計画の１ヵ年の取り組みで何を勉強したかというと、当然教育の本体を勉強しました。しかし、もう一方で、自治会の加入率というところにいったんですよ。自治体の加入率というのが課題だと。地域の安全・安心をつなげるためには人がつながっていないといけない。これをどうしようかという時に、我々は気づきました。PTA だと。新しい組織とか新しい取り組みというのは、なかなかやりにくい。しかし PTA というところは、町内に子どもがいる限り延々と続くわけです。子どもは下からどんどんどんどん上がってくる。その親たちもどんどんどんどん上がってくる。この PTA に加入しているこの期間を、徹底的に行政が哲学と理念を持って取り組むと間違いなく 10 年、20 年後の組織率、加入率が上がるわけです。10 年後の地域の結束にもつなげられる。ここに力を入れればいいんだと気づいたんです。

我々はワークショップをしながら、住民が気付いて取り組んでいったから凄いものができた。こういう市民性の教育の場が絶対必要だと思っています。PTA 活動をしながら、そこまでは至りませんでした。再度、市民性教育をやるまでには至らなかった。でも、これは誰が担うのかと言うと、やはり行政だと思います。ここは。行政が出来る部分と、市民ができる分とがあって、我々はそういう理念を持って活動しているから、教育行政はしっかりそのことを踏まえて PTA 活動を支援していくということが大切なんだろうと思っています。前回の話の中でも佐藤先生が出されたのはこのことなんですね。「誰がやるか」「誰が担うべきか」、これは棲み分けしないといけない。

もう一つ、京都市の御所南小学校の話がありました。御所南はかなりレベルが高いです。それは、地域がそれだけ作ってきたからなんです。でも高いからといって無理ではない。翔南小学校もまだ走り出しですけど、あそこを目指しているわけです。無理ではない。小さな成功体験を積み重ねていけば多分、すばらしい地域が作れるだろうと思っています。

これから校長先生の話になりますが、仲村校長は、「わんから塾」というのを作りました。PTA の総括でもありますけれども、そのあたりの話も踏まえられると思います。

そして、地域コーディネーターの千恵さんは、結局３校見ているんですよね。できれば１校に一人ずつコーディネーターを配置したいところです。これは今、国からの補助があります。三分の一の補助があるからできている。補助が切れたときに行政がどう判断するか。トップがどう判断するかです。補助が切れてもやる、なおかつ３校配置するとなったらそれなりの予算を付けないといけない。その決断をするくらいの覚悟を持ってないといけないんですよね。地域コーディネーターの活動実績は素晴らしいです。この評価を教育に携わっている人だけじゃなくて、予算編成するみなさんに伝えきれるかが重要です。説得のポイントとしては、将来の自治会活性化につながるんですよ。そしたら、安全・安心につながるんですよ、と。そういう理論構成でつなげないとおそらく予算はつきにくいだろうと思っています。

では、続いて、仲村校長にお願いします。

仲　村：皆さんこんにちは。校長先生というより、今はミッキーさんと言わせています。宜しくお願いします。私はもうこの３月で退職していますけれども、４年間、前城さん、大宜見さんたちと一緒に翔南小学校で楽しい思いをさせていただきました。

振り出しは、琉球大学を卒業して集団就職みたいな形で行った神奈川県です。私は教師をや

りたくてやったのではありません。むしろ、「絶対教師にはならないよ」ということで、大学へ入学したのですが、子どもが好きなものですから、子どもがたくさんいるところは学校だというわけで、途中から二級免許を取って教師として学校現場に入った次第です。子どもと関わるのが楽しく、ニコニコしている子どもたち、明るい子どもたちが見たい、それが教師としての一つのテーマかな、と思います。

神奈川の学校に就職して２年目に特殊学級を作ることになりました。私は大学では心理学科でしたから、自閉症の子どもたちをよく見ていました。そういった関係で、免許は持っていないのですが、私にクラスを持たせてくれないかと強引なこともして、特殊学級を持ちました。

そのお陰で、サッカーを覚えました。特殊学級の子どもたちは周りの子たちとなかなか遊べません。特に神奈川の学校では特殊学級の設置方法が、集中方式で、単位４校ぐらいの子どもたちが私の学校に通うのです。それで、家に帰っても周りの子と学校が異なるので、余計遊べないのです。これ、なんとかしなくちゃいけないなと思っているときに、思いついたのがサッカーチームです。同僚がたまたまサッカー部作っていたものですから、「この子たち入れてくれ。私も手伝うから」ということで、サッカーを教えることになりました。全くルールも分からない中で、地区の大会で審判やらされました。オフサイドが分からないのにです。ある公式試合で初の線審として立っていたときです。試合中に向こう側から怒鳴っているんですよ。どうしたのかなと思っていたのですが、私の同僚も私が審判できないと気付いて途中からすぐに交代してくれました。全く、サッカーの素人がサッカー部に関わり、サッカーを覚えることができたのも、放課後の独りぼっちの子どもたちをなんとかしたい、笑顔でいさせたいという想いからでした。

神奈川から沖縄に帰ってきて、糸満の喜屋武小学校に勤めることになりました。そこでも、子どもたちの放課後の過ごし方で気になることが多々ありました。ヤンチャして、危ない遊びやタバコなどの問題です。子どもたちが生き生き楽しく過ごせるようにと、２年目になって放課後サッカーで遊ぼうと呼びかけ、サッカーチーム作りました。サッカーはマイナーなスポーツだったものですから、運良く、しばしば沖縄代表で九州、全国大会に行かせてもらいました。

２校目、豊見城小学校に行ったときも、GMC というサッカーチーム作りました。Good Morning Club の名前通り、早朝サッカー活動のチームでした。GMC でも、特に特殊学級に行っている子どもたちを集めて、また運動苦手な子も親子でサッカーをやろうと呼びかけて、早朝のサッカーをしていました。

５年後に真壁小学校に転勤したのですが、豊見城小学校の GMC を指導してくれる方が見つからず、早朝は豊見城小学校の GMC でサッカーを継続指導していました。真壁小学校では六年生の担任でした。ここには男女別のバスケット部がありました。ところが指導する教師がいないということで、六年生の子どもたちからの願いが強く、私がやらざるを得ない状態で、豊見城小学校と合わせ、結局３チームに関わることになりました。

そんな感じで、あっちこっち行きながら、翔南小学校に来る前は、渡嘉敷島にある阿波連小学校という、児童数が 20 名前後の学校に勤務しました。

渡嘉敷島では、海が直ぐそばにあるこの土地の特徴を生かし、カヌーを使った部活をさせようということで、カヌーを体育の授業に取り入れていました。昔から小さい学校はバドミント

ンをやれば大丈夫というのがあったようですが、今では本島の大きい学校でもバトミントンをやっている子が多くなっていますから、発想を変えて、是非ここでしかできないカヌーに取り組むべきだと思いました。ただ周りの発想を変えるに至らず、ちょっと残念ですね。

その小さい学校から翔南小学校に転勤し、体育館でここの子どもたちを見たときに、まず驚きました。子どもたちって、こんなにいっぱいいるんだと。私は前任校を紹介するのに、「世界一大きなプールのある学校から来ました。そこのプールはね、凄いんだよ。先が見えないくらい大きいんだよ」と。前任校のプールって、海ですから。(笑)

小さい学校での良さを見てきたものですから、そういう部分を是非、翔南小でも生かしたいと思いました。渡嘉敷の PTA 活動は、子どもはいなくても「なぜ自分を PTA 会員に入れないのか！」と怒るくらい活発です。結構、県外の方がたくさんいて、北海道から沖縄までいて、みんなが学校へ関わります。何か行事があるといつも一緒にやる。さっき言ったカヌーの体育の授業のときも声をかければ、すぐ来てくれます。午前中ならインストラクターの皆さんは、結構ゆとりがあって、「カヌーが足りないでしょ。こっちのカヌーを使って、指導するよ！」と一緒に指導するようなところです。子どもたちの名前を地域の皆が知っていて、これが学校の理想だなと思いました。

翔南小学校は大きい学校だけれども、こういう小さい学校を翔南小学校の中に作ってやれば、小さい学校での素晴らしい面と、小さい学校で足りなかった子どもたちの豊かな交流ができる面の両方ができる、それが理想的な学校だという想いで、翔南小学校を経営していました。小さな学校で見た、我が子だけでなく、隣の子たちの成長にも気遣いできる親、地域の大人や先輩に囲まれた学校を、ここでも再現したいなということです。

学校のあり方として、地域とともに高め合う、学校が頑張って地域を高め、それでまた地域が学校を高めてくれる、そういう学校づくりができたらいいなということを考えてきました。

子は鎹（かすがい）とよく言われますけれども、地域の親をつなげるのも、やっぱり子どもだと思います。子どもを通じて親をつなげ、そこで親の教育力が高まり、地域の教育力が高まって、さらに子どもが伸びるんだということがありますので、子どもを上手く使うというのが有効かなと思います。

翔南小学校でこんなことがありました。年度初めには、学校経営説明会があります。赴任1年目、それを視聴覚教室でやると教頭が言うのです。「なぜ350名も保護者がいるのに、あんな狭い所でやるの？」と聞いたら、「いや、集まらないですよ。20名、30名集まればいいほうですかね」と。案の定、最初の学校説明会では PTA 役員しかいないのですよ。これでは困るということで、「では、もう一回やろう」と。そこで、子どもを使い、保護者を集めようと作戦を立てました。私が体育館で親子全員を集め、10分だけ読み聞かせをやるから、そのあと子どもたちは教室に返しなさいと。子どもを集めれば、親も集まるのです。子どもを集めて10分経ったら、「親はそのまま座っていてください。子どもは退却―。」その作戦を提案したら、職員の中から、「いや、校長先生、僕たちが読み聞かせ、配役を決めてやります」ということで、プロジェクターを用いて、読み聞かせを職員がやってくれました。そのような子どもを使う作戦で親を集め、学校経営説明会が成功しました。あの時は字ごとの親も交流させようということで、字に分けて座らせて、字ごとに自己紹介もさせました。

学校が一生懸命やっている姿をいつでも紹介する、親に見せることによって、学校はこんなことやってるんだ、ということが分かる。お互い見せ合うことによって、地域両方がこうやって高まっていくのではないかなと思っています。

学校支援地域本部事業の取り組みも後でご紹介しますけども、学校側は常々、保護者や地域の方々に「学校支援をしてください」とお願いをしています。しかし、学校支援は子どもたちだけではなくて、地域を高めるということにも有効なわけです。地域の人たちは、いろいろな個性や才能を持っているのですが、それを発揮する場を学校が与えることによって、学校に愛着を感じ、自分は役に立つんだ、自分もできるんだという自信や生きがいを持てるようになるからです。

「わんから塾」というものが先ほど前城さんからご紹介がありましたが、「わんから塾」を始めた私の意図としては、家族同志のつながりもここで高めたいということがあります。

今、親同士のつながりが弱くなっています。授業参観で自分の子どもしか見ていない、そういう親が多いのです。そのことは親と我が子とのつながりさえ希薄なのじゃないかと感じます。我が子を知らないから、我が子を授業参観で知ろうとして、よその子を見る余裕もない。そういう親子関係なんじゃないかなという気がします。

翔南小学校は部活が盛んです。今年は野球が３チームあって、男女バスケットがあって、今、新体操も頑張っていますし、私が赴任してからサッカーもやっていますし、教頭先生がバレーボールを教えていて、女子が頑張っています。このように放課後、たくさんの子が部活を頑張っています。ところが、部活終わって学校から帰ったら、さぁ、家庭学習もしなくちゃいけないってことで、ご飯を食べて、子どもは自分のことをやることに精一杯で、親とのつながりって本当は少ないのではないかなと思います。

そんなことを目にして、私は、家に帰ったら勉強よりもまず家の手伝いをさせて欲しいとを親に言っています。家族の一員としてやるべきことをやって、それから好きなことはやるべきだと。手伝いをしてから寝なさい。勉強をやる必要があるのだったら、学校でやって帰りなさい、と。教職員の中には、「なぜ家庭学習を学校でやるの？」という声もあります。家庭学習させる理由は、本当は学校でやるべきだけれども、学校ではやれないから家でやってきなさいよと、そう私には思えるのです。それだけ覚える必要がある学習内容なら、何時間でも残してやって、学校でやるべきことができたら帰りなさいっていう形のものがいいのではないかと思います。

そういった意味で、部活行く前に、「わんから塾」でやって、そして部活に行きなさい、ということを子どもたちに呼びかけています。その「わんから塾」も教師には負担をかけないでおこうということで、最初に作った３年前、担任は関わらないでよいから、もし音楽専科とか図書館司書の先生等、学級を持ってない職員で手伝いできる人は、やってくれないかとお願いしました。それは、まずは学校がやって見せながら、最終的には外部支援者、学校支援の方にお願いして、全面的にやってもらおうという考えでした。翔南小学校で始めたことですが、それが今年度から、南風原町の４校で足並みをそろえてやると聞き、嬉しく思っています。

ややもすると、放課後の部活をすごく毛嫌いしていて、「部活しかやってなくて、もう大変だよ」と言うのですけども、子どもが好きなのは是非認めてあげながら、その足りない部分を何

とか補ってあげることが大事です。部活頑張れ、でもその前に「わんから塾」で勉強しよう、ということがいいのではないでしょうか。

あと、毎週私のほうで子どもたちが活躍している様子、学校の様子を「学校便り」として出していました。

HP ですが、これも私の方で毎週更新していました。前の渡嘉敷島でも保護者が北海道とか県外が多かったので、その子たちの活躍している様子を HP に載せているものですから、北海道で沖縄にいる孫の様子が見えるということで、とても好評でした。少しでも HP の更新が遅れると、「どうしたんですかね。校長先生、調子でも悪いんですかね」と言うくらい。(笑)

HP で嬉しい思いをしたことが、まだあります。海が荒れ、せっかく旅行で来た人たちが海に入れないので退屈そうにしています。そこで民宿に電話しました。「民宿にいるみなさん、図書館使っていいですよ」とか、あるいは、「体育館に来て一緒に交流しませんか？」とか。

ある年には、特別支援学校専攻科の 18 歳過ぎた生徒たちが卒業旅行ということで宮城県から来ていて、学校のすぐ裏の民宿にいました。ところが、雨降りで海も荒れて、せっかく来たのに、海に入れません。そこで、「長い休み時間 20 分休みの間、交流しませんか？」と声を掛けたら、喜んで交流にやって来ました。夏休みにも、台風で民宿に閉じこめられた観光客家族を図書館に誘い、子どもたちと交流させました。それらを HP にアップすると、向こうに帰ってから HP を見てくださって、「来年もまた来ますから！」と嬉しいメールが届きました。

次は地域の子ども会支援を学校が取り組んだ話です。町内の北丘小学校区は子ども会が盛んだということですが、翔南小学校では会費を払って加入する字子ども会は少ないのです。新しくアパートができて、そこに住む保護者は会費出してまでは子ども会に入らないという方が多いようです。各字・支部には毎年、PTA 支部長という役職の方がいて、夏休みのラジオ体操など子どもたちの行事を企画し運営することになっています。しかし、まわりの保護者の子ども会への関心の低さで、子どもたちを地域で集めることは困難です。自ずと子どもたちの行事あるいは活動が、なかなかできません。そこで、学校で地域を支援することにしました。各字の支部長も学校に招き、昔よくやっていた字子ども会というものを学校で開いたのです。「夏休みにこういう活動やるから来ましょう」とか、「ラジオ体操このようにやるから一緒にやろうね」といった話し合いをする場を復活させました。各支部割り当ての担当教師も置き、字の行事があるとき、綱引きとかありますので、そのときは行って親に顔を見せ、学校が地域の支援をする姿勢を伝えています。

それから、字学級というものを試みたことがありました。それは何かと言いますと、幼稚園入園や、小学校入学時に同じ字の子どもは同じクラス（学級）に入れることです。翔南小学校では、入学時、三分の一はよその幼稚園から入ってくるためか、親同士のつながりが少ない、弱い感じがしました。ショックだったのは、同じアパートに住んでいるのに、どの部屋に住んでいるのか分からなかったことです。そんなつながりしかないものですから、「この字の人は全部同じ一組（クラス）に入れよう。ここの字の人は全部二組に入れよう」そういう形で低学年のうちに同じ組に入れたことによって、「うちの子と一緒に行きましょうね！」とか、「今日は車で送りますよ」とか、親同士のやりとりが出てきました。字学級をやる前に、幼稚園の方だけ、来年の一年生からは字学級作ってみたいけど、どう思うかアンケートをしました。アンケ

ート結果では「ちょっと不安だ」とか、中には「帰りはおじいちゃんの所に行くから関係ありません」という返事もありました。賛成・反対半々くらいでしたから、やることにしました。職員のほうも、「こんな取り組みどこでやっているのですか？」と聞いてきました。「やってないですが、やってみましょう」と実施しました。１年後、結果についてのアンケートをとったら、とても良いものでした。幼稚園や一年生の担任からも「とても好評でした」と感想があり、やって本当に良かったと思いました。それで２年目もやりました。しかし、２年目は一年生のある学級が学級崩壊みたいになってしまい、それが保護者同士のつながりの弱い字の子どもたちのいる、字学級のせいだと職員の中に言う者がいて、３年目は字学級を止めました。私としては、つながりを強めるための字学級であり、チャンスだと訴えたのですが、逃げてしまった感じがし、とても残念です。

このように幼稚園と一年生で字学級という、小さい学校みたいなものを作って、親同士がいつでも相談できるつながりを作ること、またそれら小さな学校が隣の小さな学校と合同学習ができるようなシステムがあればいいんじゃないかなということを私は考えていました。

次は、孤立する親の支援取り組みです。登校を渋りがちな子の親は親自身が孤立していることが多いです。この親に色々助言してあげるためには、子どもに部活動を勧め、親を部活動の保護者会に参加させるとか、あるいは読み聞かせのボランティアサークルに加入をお願いして、保護者会やボランティア同士で助言し合うということで進めています。不登校児の親の中には、その後、PTA 役員もやってくれた方がいました。その方は、最初はすごい教師批判・学校批判でした。でも、役員もやってとても良かったということで、PTA 主催の飲み会にも参加してくれるようになりました。

学校が地域支援をスムーズに進めるために、学校職員の人事配置の要望として、町内在住か近郊在住の方を職員として赴任させてくれるよう教育事務所人事担当へお願いしてきました。

私自身、神奈川の学校に勤務している時は校区内に住んでいましたし、豊見城小学校勤務の時も校区に住んでいました。学校がそばにあるものですから、車を忘れて家に帰ってしまったこともありました。夏休みは、校区内の方々と毎日関わっていました。そんな感じですから、校区内にいて、いつでも地域の支援がやれることは大切だと思っています。

いつでも地域に入っていける教員が欲しいということで、人事担当には要望を出していて、だいぶそれが叶っているかなと思っています。町内在住の教頭先生が赴任して、本校のバレーボールをずっと指導しています。地区の少年少女バレーボール協会の会長もやっている教頭です。そんな感じで、地域に溶け込んでいる教員が多くいて、それはやっぱりいいものです。

離島の小さな学校と比べて、翔南小学校の良さについてお話しします。まず、多様な個性を伸ばせるということです。子どもの数や特徴ある人材、地域に色々な指導者がいるものですから、それらが有効に活用できます。例えば、渡嘉敷で将来サッカー選手になりたいという子がいて、「うんうん、いいな。でもここでやるにはちょっと人数が足りないな」ということで、しかたなく毎朝２人だけでサッカーの早朝練習していたこともありました。しかし、ここではやる気になればなんでも好きなことがやれるなという環境があります。色んな施設も充実しています。

ところで、それは課題にもつながってきます。本当は、字の子どもたちというのは、いつで

もつながっていて欲しいなと思っているのですが、結構、部活に行っている子が多いものですから、子ども会にあんまり参加できないのです。部活が、結局、地域壊しみたいなことになるのです。ですから月水金は部活はなし、火木土は部活をやるんだと、こういう形にもっていかないと、競技力だけ高めるということだけ一生懸命でやっては困るのです。私自身もサッカーで地域壊ししてきた部分があると思うので、いつも子どもたちには、「家庭で大事な用事があったら、部活来なくていいよ。地域の行事があるならいいよ。それをちゃんと行ってね」ということを言ってきました。指導者の中には、やはり競技力を高めることだけに一生懸命で、地域づくりということを考えないという方もいらっしゃいます。そのあたり翔南小もスポーツが盛んな分、考えなければいけません。

また、部活動の親の教育力は高いです。親同士の団結は強いです。それを上手く活かす方法としてPTAでは各部に助成金をあげているのですよ。その分、PTA活動に参加して色々協力して欲しいということで、PTAの総会、歓迎会の時には、各部の出し物をやってもらいます。去年は余興もたくさんやってもらいました。そうすると、子どもたちがいっぱい集まります。ただ、地域に戻ったときに、僕たちは地域とは関係ないっていうね。ちょっと弱いかなと。そこをなんとかやっていけたらなと思います。

前　城：校長先生が話されたのは、レジュメの中にある「地域と共に高め合う学校」の部分ですね。我々沖縄自治研究会が研究対象としているのも特にこの部分です。学校が地域を高めることができるという、そのあたりは、４年間の実践の中で我々もしっかりと目指すことはできていると思います。ただ、これを継続するところがとても大事です。継続できるかどうかというところが、私と大宜見さんの最初の大きな課題でした。

私と大宜見さんが決めていたのが卒業してからが本格的だよね、ということです。私も今年でPTAを卒業します。そのあと、翔南小学校・南星中学校PTAでどうやって関わっていけるかというところが、継続につながるんだろうと思っています。PTAは子どもがいるときで終わりじゃない。その後の継続が地域をつなぐことになるんだということも、しっかり実践を伴いながらやっていければいいかなと思っています。

校長先生の話にもあった「わんから塾」を始めたきっかけで、わが子とのつながりが薄いというところ、現場の先生方じゃないと感じないところだと思いますね。これを初めて聞いて、そうなんだと思いました。我々も学校に四六時中いるわけでもないですし、学校で子どもたちと四六時中接しているわけでもないですから、接している先生たちは我々の舵取りです。現場の先生とどれだけ密接に情報交換できるかというのは、すごく大事なところだと思っています。まだその辺は薄いです。この辺をしっかり取れるようにしていきたいと考えています。

そして、その現場に実際に関わっているのが、コーディネーターの千恵さんともう一人は赤嶺さんという方です。お二方の存在というのは、僕はすごく大事なポジションにいるんじゃないかと思っています。儀間さんが関わって３ヵ年目です。この３年で、おそらく人材育成ができるだろうなと踏んでいました。その３年間で蓄積した人材をどう活用するかというのが南風原町の教育行政では大きなテーマになってくるだろうと思っています。では、これから千恵さんのほうにお話していただきます。宜しくお願いします。

儀　間：こんにちは。はじめまして。南風原町で学校支援地域本部コーディネーターをしております、

儀間千恵と言います。宜しくお願いします。このような場は初めてなのでちょっと緊張しておりますので、何分喋っていいかっていうのを教えてもらえますか？

島　袋：15分、基本で。

儀　間：基本、おばさんなのでしゃべりだしたら止まらないんですよ。（笑）なのでリミットを設けていただけるとありがたいです。15分ですね。分かりました。

充さん、洋文さん、仲村先生はやはり地元なので校区は違いますが、お顔を見る機会が多いので、ゆんたくもしますし、真面目なお話もすることが多かったです。でも、今日ここへ来て、それぞれの立場、想いで、こんなにも一生懸命やっていたんだなというのを改めて感じました。充さんは行政の立場、洋文さんは自治会長、PTA、仲村先生は学校経営者・責任者という形でこんなにも一生懸命やってくださっていたんだなということを、改めて今知ることができたので、この機会を与えていただいたことにとても感謝しています。

私はコーディネーターというのをしておりますが、このコーディネーターをするにあたってなんら資格とか免許とかはなかったように思います。というのは、普通のおばちゃんなんですね。教員もしたことありませんし、子どもが生まれてからは専業主婦でした。なぜ、専業主婦になったかと言いますと、期間限定だから。今しかないと思って仕事をきっぱりやめて、家庭でどっぷり子どもと向き合ってきたつもりです。子どもと向き合うということは家庭保育なんですけれども、やっぱり外に遊びに行かないと家でばっかり育てているわけにはいかないんですね。

南風原町に越して来たのは17年前になりますが、家を作りたいと夫と二人で考えました。夫も私も那覇の出身なのですが、今まで那覇で暮らしてきて、学生生活、独身生活を送ってきて、自治会活動に参加したことがありません。親も自治会費を払っていたかということも知りません。そんな状況の夫婦でした。それが、私たちは家を継がなくても良い次男・三男だから旅をしてこようと、1年かけて豊見城から読谷村まで国道58号線を軸に土地探しをしたんです。毎週不動産情報を見てアポとって、土地を見にいきました。

それで出会ったのが南風原町の宮平というところです。今まで見てきた中で一番良かったんですよ。何が良かったかっていうと、近所のおばあちゃんが声をかけてくれるんですね。最初に、不動産屋さんにアポを取ると「じゃあ丸大スーパーで待ち合わせしましょう」と言われ、「丸大スーパーってどこですか？」と聞いたら、「丸大スーパー分からないんですか!?儀間さん」と言われたり、それくらい地元意識が強い地域で、「国道329のですね～」と道案内から始まり、丸大スーパーで待ち合わせをして、連れてきていただいたところが、300坪あまりの空き地だったんですね。家族で行きました。子ども3名。そしたら、散歩していた近所のおばあちゃんが声をかけてきてくれまして、これが今でよくしてもらっている「赤嶺のおばあちゃん」で、屋号が「アガリメントー」と言うんですけど、そのおばあちゃんが、「あんたたち、こっちにお家作るの？」と声をかけてきてくれたんですね。「そう考えて見に来ました。宜しくお願いします」と言ったら、おばあちゃんが「ここにしなさい」と。必ずこの長方形で五つに分割された、この南の角にしなさいと言うんです。南東の。「どうして、ここがいいんですか？」と聞いたら、「ここはね、今は空き地だけど、前は畑だった。色んな作物作っていたけど、野菜作ってもキビ作っても、この場所が一番良く育った。何でかって言ったら、日が当たって、水はけがいい

からよ。反対に、あそこは年がら年中、水がじゅくじゅく出てて、あっちは良くないから買いなさんな」って。地元のおばあちゃんがここがいいよって、どこの海の者山の者とも知らない初対面の私たち若夫婦にアドバイスしてくれる、散歩しているおばあちゃんがいたんですよ。もう、夫も私もカウンターパンチですよね。ここにしようと決めました。１年探して、やっとめぐり合えたね、ということで、すぐ決めました。

それで、夏休みに引越しをして、９月から転校しようという計画で来たんです。夏休みに家が完成して引越し作業をしていたら、近所の子どもが毎日見に来るんですよ。で、「手伝う？」と聞くんですね。うちも子どもがいますから、近所の子も気になるんですよね。遊びたいなぁというそぶりを見せて、「何か手伝うね？おばさん」と言うから、「じゃあごめん、ダンボール運んでくれる？このダンボール２階のお部屋に持っていってくれる？」という感じで、毎日、近所の子が引越しの手伝いまでしてくれまして。お昼時になったら、帰らないで立っているんです。「あ！なるほど！」と空気を読んで、「お腹空いたね～ごはん食べようか」と言って、何食べたいか聞いたら、カレーを作りたいと言うんですよ。毎日、手伝いに来る子どもが、言うんです。「カレーライスか。でもね、冷蔵庫も買ったばっかりだから、材料ないんだ」と言ったら、「丸大で買ってくるよ！」と言うんですよ。(笑)「あー、すごい、お使い頼める？」と言うと、「いいよ！」と言って。メモも鉛筆も持ってきて「おばちゃん、お米ある？」「お米も買わないといけないね。でも重たいよ？」「大丈夫、５キロだったら二人で持てる！」とか言って。もうすごい！この子たちの力が。それで、「材料分かる？」と聞くと、「お肉、にんじん、たまねぎ…」と言って子どもたちがメモをしてくれて、私はビニール袋に 3000 円くらい入れて、自分の子どもがちょうど小学校二年生、幼稚園生、１歳半でした。幼稚園生から小学校の五、六年生くらいまでの子が近所にはいっぱいいて、持ち家の子もアパートの子もいっぱいいて、この子たちが毎日出入りをして、買出しをして、一緒に台所に立って、ご飯を作って、まだできていない凸凹している庭にブルーシートを敷いて食べました。そういう経験を私は那覇から南風原町宮平に引っ越してきてさせてもらいました。

夏休みには夕方になると、近所の子が「花火とカキ氷の夕べに行こう！」と子どもを誘いに来たんです。６時半くらい。こんな夜から子どもだけで遊びにいくなんて考えられませんよね。「どこに行くの？」と聞いたら、「おばさん、わからんの？宮平公民館でね、タダでカキ氷食べられて、花火ももらえるんだよ」と。どういうことだ！と思って、ついて行ったら、子ども会主催の毎週何曜日と決めた日に、それをやっていたんですね。もちろん、私たちはじめて行く住民なんですけど、「おいでおいで！並んで並んで！」と言って、タダで本当にカキ氷も食べ放題、花火もくれるんですね。それには感動しました。最初はタダだと思わないから「すいません。いくらですか？」と聞いたら、何言ってるの、この人は!?というふうに見られて、「宮平子ども会だから入りなさいね。あんた手続きしにきたらいいさ」ということで、ご飯もお菓子も食べさせてもらって、遊ばせてもらったので、恩を感じて、私は翌日、宮平公民館に行って自治会に加入して、子ども会の会費も払ってまいりました。

そんなこんなで越してきて不安なときに、子ども・大人・おじいちゃん・おばあちゃんに迎えてもらったな、よくしてもらったなという思いがあって、子ども会の役員をしたり、学校で PTA 活動をしたり、というのが自然にできました。今までそういう素地が全くなかった私たち

が自然に地域に入って関われることができたというのが、今とってもありがたいなと思います。

それが今のコーディネーターという仕事につながっていると思います。南風原町がこの「学校支援地域本部事業」を採用するにあたって、担当者はコーディネーターになる人を、PTA 活動や子ども会活動の経験者で、学校と地域にパイプがある人を探していたそうです。その時に、誰かが私をあげてくださって採用に至ったという経緯があります。

それでは次に、町の取り組みを紹介します。資料『平成 22 年度南風原町学校支援地域本部事業報告書』の説明ですが、支援ボランティアの活動内容と人数が載っています。写真もありますので、一目瞭然だと思います。6、7ページが南風原中校区の活動写真です。南風原中学校区というのは、北丘小学校と南風原小学校が含まれます。その中で、こんなことをやりましたというのが5ページにあげてあって、その様子の写真が6ページと7ページです。充さんたちのいる南星中校区というのは、翔南小学校と津嘉山小学校が含まれますが、その取り組みは、8ページから 10 ページです。11 ページからは、その活動に関わったボランティアさんの立場の感想、子どもの感想、教師の感想、その後には課題があります。

まず私たちがやっている学校支援地域本部事業というのは、沖縄県でも多くの自治体が取り組んでいるんですが、コーディネーターの基準とか人数とか配置というのは、本当にばらばらなんですね。沖縄市のように、市内の学校全てに1人ずつ配置されているという自治体もあれば、1つの中学校区に限定して1人だけ、というところもあります。那覇市は広いですから、那覇市の中でも特定の中学校校区を選んで、その校区内の学校それぞれに1人ずつコーディネーターが配置されているところもあります。私たちは研修会などで、色んな地域や学校の取り組みの話を聞いて、参考にして、自分たちの支援本部でやりたいと考えています。

南風原町が最初に作ったリーフレットがあります。「学校支援地域本部事業を南風原町が始めました。町民の皆さん、理解してください。協力してください」という意味で最初に作り、これを全家庭に配布しました。区長さんが自治会加入の家庭にポストインするんですが、PR 活動ですよね。中にこの黄色い用紙が入っているんですが、これはボランティア登録用紙です。「学校でこんなことを求めていますから、皆さんボランティアになってください！」と。それで、何名来たと思います？いわゆる一般公募をして何名きたか？何万部配布したことになります？充さん、南風原は何世帯ありますか？

前　城：一万ちょっと？

儀　間：一万ちょっとの皆さんの手元に届いて実際に申し込んだのは3名でした。公募というのは、こんなもんなのだなというのを実感しました。残念ながら公募で来た3名さん、現時点で実際の学校支援につながってないんですよ。これは私たちも悩むところですが、非常に特徴のある3名さんでですね。まず、自分はこんなことができる！こんなことがしたいんだ！だから、学校にボランティアに入りたいんだ！と非常にアピールが強いんですね。とてもやる気があるのですが、残念なことに、主張が強すぎて教師の意見が受け入れられないのでは、という心配がある。どうにか学校サポートにつなげられないかなと思っているんですけど、行政批判や学校批判の気持ちが強すぎる方や、地域で認めてもらえないから是非登録したい！という方には、私たちは慎重になりますね。なので、今実際にボランティア活動につながっていないというのが、課題です。でも、この人たちもどうにかして、学校につなげたいなという気持ちもあります。

実際に、22年度のボランティア参加人数は282人です。町内6校です。延べ人数で1700余りになっています。1年に1回の方もいれば、毎週来る方もいて、延べになるとこれくらいの数になります。

実際に、どうやって私たちがコーディネートするかというと、またこのリーフレットに戻るんですが、下のほうです。支援の例というのが、学習支援、環境整備、安全パトロール、クラブ活動とあるんですが、私たちが中心にやっているのは、学習支援です。ドリルの採点をしてほしいとか、総合学習のゲストティーチャーになってほしいとか。それを学校現場の先生方から直接ニーズとして拾っています。カウンター方式と言うそうです。先生方に、「何かありませんか？地域の方にお手伝いしてほしいことはありませんか？」と私たちはお伺いを立てます。これを私と赤嶺さんで秘かに「営業活動」と呼んでいます。（笑）営業にマメに行きます。そうすると、先生方が、この注文用紙みたいなのも作ったんです。それを学年の先生方に1枚渡して、そうすると学年の先生方が相談するんですね。例えば、一年生では11月に昔遊びしたいねと言うと、おじいちゃん・おばあちゃんをできるだけたくさん欲しい、と来るんです。六年生では、10月の運動会でエイサー演舞を披露するんですけど、三線の地謡で生演奏してくれる人が欲しいとか、二年生では昔のムーチーの話をしてくれる人が欲しいとか。三年生では、総合学習で地域のことを学ぶので、地域の特産品とか農産物の話しをする人が欲しいとか。それぞれニーズをあげてくださいます。私たちはそれを貰って、PTAでお願いできるんじゃないかというようなことはお返しします。環境整備にしてもPTAで間に合うんじゃないでしょうかというようなときは、学校に一旦お返しします。PTAで賄える部分もあるし、PTAでやって、なお足りない部分や教師が教えられない専門的な部分を私たちが負うということをやっています。

実際に先生からニーズがあがってきて、「地域でこんな人いませんか？」と探すことが、私たちの仕事ですよね。今までは教師が休み時間とか放課後に区長さんに電話したり、関係者に電話をしたりして探したりしていたことを、私たちがやっているというのが一番負担軽減といえば、そうなるのかな。それをするには、私たちが先生の話をよく聞かないといけないです。どういう授業をしたいから、どういう人が必要なんだって。それを聞くために、私たちはまた学校に出て行って、先生と打ち合わせをするんです。

それで私が気づいたことは、自分が保護者でPTAの立場で学校に通っていたときに見ていた、捉えていた学校、教師の違う面を私は見ることができたんです。それはとっても良かったと思うんです。授業作りに対する工夫とか熱意があって、授業をしているんだ。1つの授業を作るのに、これだけの労力、時間がかかっているんだ。これは、ひとえに子どものためになること、去年と同じことをやっていればいいさ、ではなくて、もっといいことをしたい、もっと学ばせたい、もっと刺激を与えたい。それには、教師がここまでやって、ここからは誰かに頼もう。専門の人を呼ぼう、お手伝いの人を増やそうというのを教師が考えてやっているんだなというのを、私は一親として、保護者として見せてもらえたというのは、個人的にもとても良かったなと感謝するところです。

教師からのニーズを受けて私は地域の人にあたります。例えば、退職教諭ですね。算数の補助が必要、TTが必要。放課後に補習をしてくれる人が必要となったときに、「どんな人がいいんですか？」と聞いたら、「できたら退職教諭が慣れているからお願いしたい」と。「大学生で

もいいです」と。それを探すときに、知っている退職教諭がいたら直にあたりますが、なかなか人材って手持ちが少ないので、誰かいませんか、という時に字の区長さんにあたるんですよ。区長さんというのは、公民館にいて情報が集まりますので。ボランティアのお願いをする時には、「色んな方に推薦いただいてお電話しているんですけど、今度北丘小学校で算数の補助をしてくれる方を探しているんですが、もしご都合があえばお願いしたいんですけれども」と言うと、即決「やりますよ！」という方もいれば、しぶる方もいます。電話だけでは頼めませんから、リーフレットを持って面会に行くんですね。その方のお家を聞くのも、区長さんに教えてもらうんです。公民館に行って、区長さんとお話をして、教えてもらって、自分の足で探しています。電話１本でお願いして来てもらうというのは失礼だと思うので、直接伺って、「南風原町では子どもたちのためにこんなことをしているんです」という説明をして、「こういう方たちがたくさん学校に関わってくださっているんですが、もし宜しければお仲間になっていただけませんか？」ということで「じゃあいつ頃ですか？」と聞いてくるんですよ。「こんな日程なんですけど、できる日でいいですよ。みなさん、お忙しいですから無理しないで下さい」と。例えば、５回あったら、じゃあ１回くらいだったらできるかな、と。もうそれで御の字だと思うんですね。全部お願いするというのは、やる方もいますけど、有難いですけどボランティアさんには無理をしてほしくないんです。学校は子どもがいる限り続くので、学校支援地域本部事業は打ち上げ花火ではいけないと思います。この方には毎年やってほしいので、今無理をして、もう疲れたから来年やりませんでは困るのです。ずっと続けていただくためには、細く長〜く、大原麗子じゃないですが、それは私たちが肝に銘じていることです。ボランティアに無理をさせない。これは依頼するときのポイントです。それで、引き受けてくださった方は、学校に報告します。どこそこに住んでるこういう方がやってくださることになりました、と学校につなげます。そういうことを日々繰り返しています。

１年間に何百名の人が、こんな学校支援をしましたよ、というのが報告書の写真に出るところなんですね。ボランティアは 18 才の大学生から学校の隣の畑の 85 歳のおじいちゃんまでたくさんいるんですよ。それだけ、学校というのは、色んなことを教えているんだな、と単純に感動しました。子どもの教育ってすごいんだなと。これも発見でした。だから学校教育って物凄い重要、大切なことをやっているんだな。これを応援できるというのはいい仕事だなと思うのと同時に、反対に、さっき仲村先生が不登校と言いましたよね。不登校などで行けない子どもってかわいそうだなというのも感じました。行けばこれだけ友達とも触れ合えて、色んな勉強をできる機会がある。だけど何らかの事情、いじめだったり、ネグレクトだったり、病気だったり、障がいだったりで、行けない子がいて、こういう体験ができないっていうのは、かわいそうだなというのも気がつきました。まぁ、そこに対する支援というのはできていないんですけど。

支援した人が、どんな人がいるかというと、一個人から組織まで、かすり組合や JA、NPO の平和ガイド、公民館の趣味のサークル、と多岐に渡りました。それが３年間の実績になると思います。他の地区でもやっているかもしれませんが、南風原町の特色というのはもしかしたらそこなのかな、と思います。教科の学習支援に入るのが大学生や退職教諭、民生委員。丸つけとか数学を教えたりとかというのもあります。

また、平和学習では、近所のお年寄りや、元看護婦の方が戦争体験者として毎年呼ばれることもあれば、学芸員もいます。南風原町には20号豪という陸軍病院の豪があって、そこは、整備されて見学ができて、県外からも平和学習で訪れる豪です。学芸員さんに学校に来てもらって専門的な立場から見た平和学習を行います。おじいちゃん、おばあちゃんの体験談、看護師としての体験談、南風原町の学芸員が豪の発掘体験のお話など、一口に平和学習といっても、話し手が変われば切り口が変わります。今年は新たに「NPO法人南風原平和ガイドの会」という組織があるんですが、その方たちも関わっての平和学習というのが決まりました。これは北丘小学校と翔南小学校ですが、一年生と六年生では発達段階が違うのに、1つの話を一斉に聞くという、今までのやり方にちょっと疑問を感じる先生もいらっしゃるんです。もちろん、生きた体験談を聞くことも大切にしながら、違う視点で子どもたちにアプローチできないかというのを、北丘小学校の校長先生、教頭先生は考えていて、「何かないですかね、儀間さん」となったときに、平和ガイドの会がある！と。それに、文化センターの学芸員が人的資源として南風原町にはいる。これを効果的につなげられないかな、と。私は学校側に「実は、戦争と平和のことを日々勉強して、ガイドをしている方がいるんですが、こういう方たちをどうにか学習支援に繋げられないですかね？」と言うと、学校は「じゃあ、やってみようか！」と。それで、「ＮＰＯ法人南風原平和ガイドの会」事務局の藤原さんに話をしたら、是非やってみたいと。そういうことで、今度一年生から六年生まで学年の発達段階にあった平和学習というのができることになりました。

他にもキャリア学習といって、色んな職種の方を10種類くらい集めて、講話や実演をしました。みなさんお忙しいのに、お願いすると「子ども達のために自分が役に立つのなら」と、来て下さるんですね。それで私が面白いと感じたのが、かぼちゃの生産農家とパティシエさんの会話でした。授業が終わったあと、校長室でお疲れさまでしたとコーヒーを飲んでいると、南風原特産のかぼちゃの生産農家がおいしいかぼちゃ、ブランド品のかぼちゃを作るために僕たちは、一生懸命こんなことをしていますとお話をされました。農家さんのお話のあとで、そのかぼちゃを使ったお菓子を提供しているケーキ屋さんのパティシエが、立ち上がって帽子を取って、「新垣さんが一生懸命作ってくれたかぼちゃで、私はこれからもおいしいケーキをつくるように努力します。ありがとうございます。」と頭を下げたんですよ。是非このお二人を呼びたいとおっしゃっていましたので、これが教師のお教えたかったことだったのかと、鳥肌が立ちました。教師は子どもたちに、地域の特産物を知ってもらい、将来の生産者や消費者になってもらいたいと考えている、と良く言います。地元で作っているものを地元で活かしている地産地消や、職業人としてのこだわりというものを子どもたちに考えさせたい、と。先生は、こういう授業がやりたかったんだなと感動しました。このコーディネートをしてすごくよかったと思いました。あともう1歩は、これを学校給食に出してくれないかな、ということ。これだけすると、回りますよね、何かが。ここの畑で作ったものを、給食で出して、子どもたちが食べて、おいしかったとなって。自分も将来、かぼちゃ作りたいって思うようになったら、何かが回るのかなというのを感じたので、色んなところで言っています。

前　城：それでは、南風原中の字生徒会の話もお願いします。

儀　間：南風原中学校では、字別生徒会というのを作りました。これは校区に字が9字あるんですけど、

その子ども会組織みたいなものですね。それで字生徒会を作って地域に子どもたちを帰そうというねらいで中学校が作りました。何をしているかというと、総合学習の時間に地域伝統文化体験というのをやって、それを学んで発表します。子どもたちが夏休みに公民館に行ってその字の伝統文化をいろいろ体験するんです。普段部活の子でもが公民館に行って、普段会ったことのないおじいちゃんから叱られながら棒術を教えてもらうと。知らないおばちゃんからお疲れさんねと言われて、チューチューもらうとか。そういうことをやっています。

ただこれが課題なのは、一学年の総合学習として取り組んだので、継続できなかったという点です。これを継続してほしいというのが地域からの要望だったんです。でも、要望として上がってきても、学校としてはそれを、じゃあ継続させようというには至らないのが難しいところです。

でも、字別生徒会を作ったことで、以前よりつながりは出てきています。字としては中学生に来てほしいから、行事の時に地域放送したり、地域掲示板にお知らせを貼りだしたりするんですけれども、参加者に一人も中学生がいないというのが現状でした。字生徒会のおかげで少し良くなってきたんです。この中学生たちは、年に２回、教師が引率して総合学習の時間にゴミ袋とちりバサミを持って、各字に散らばってゴミ拾いをするんですよ。それと、年度末にベンチを作って公民館にプレゼントして、それをゲートボール場に置いたり、バス停留所に置いたりしています。そういうことで、学校としても子どもたちがお世話になっている地域に恩返しをしたい、地域も子どもたちが世話になっているから学校に協力をする、というのが出てきました。この中学校のこともそうなんですけれども、学校は地域に、やってもらってばっかりが当たり前と思われたら続かないんですよね。やってもらってありがとう、またお願いしますって、お互いができるようにというのも、私たちは心がけます。先生方は、やってもらったら、必ず感謝の気持ちで子どもたちがお礼の手紙を書いたり、字生徒会ではゴミ拾いをしたりします。そうすると、もっと地域の人たちは頑張って応援しようという気持ちになるんですね。それを見やすいような形にして、それをまたアピールしようかなと思っています。中学生が地域に帰ってきて、伝統芸能でもごみ拾いでも、草刈活動でもなんでもいいから、０だった中学生が１人でも２人でも参加してくれると、また地域の人は喜んで、麦茶飲ませたり、お菓子あげたりするんですよ。「また、おいでね」と。これがエイサーに入る、獅子舞に入る、棒術に入る、とつながって、学校の授業や地域の行事で発表する。「あんた頑張っているね」と認めてもらえる。先生が地域まで見に来てくれて、「頑張っているね」と。学校の中で「誰々さんはこんなことやっていたよ」とまた評価してもらえるっていうことを、少しずつ積み上げていっています。それで、その子が青年会に入ってくれて、これから先、また地域の人材になって、スポーツ大会のテント張りを手伝ったり、敬老会の手伝いをしたりして、そこでまた育っていく人間になってもらえたらいいなというのが私たちのねらいと言いますか、それを目指して頑張っているところです。

それで、ボランティアに入った方には必ず「あなたは地域での見守りの一員になっているんですよ」とお話します。スーパーで声をかけたり、たむろしている子に声をかけてほしい。たむろしている子は普段は恐いですよね。大人でもなかなか声かけられないんですけど、中学生が学校で会ったボランティアに「あい、数学の時に来た○○さん！」とか、「読み聞かせにきた

おばさん！」と指差して声をかけるので、恐いので知らんふりして通り過ぎようとしたおばさんは、「あのときの子どもだ！」と思うから、もう無視できないんですね。それで「こんばんは。遅くならんように帰りなさいよ～。気をつけて歩くんだよ～」というのが目に見えてきました。この1763名の方が、ジャスコに行っても丸大に行っても夜道でも見守っていてくれているという実感が今あります。それをもっと密にしていこうと今頑張っています。

前　城：話された内容でキーになる言葉は、「人と人とをつなぐ」ということですよね。これは自然にはつながらないんです、絶対に。南風原は35,000人住民がいますけど、借家率は5割を超えます。アパートが多いからです。那覇と似た感じがある。那覇と違うのは、まだ農村風景があるんです。ですから、農村と都会が融合しているまちなんです。そういうところで都会の課題も抱えながら、もともと字のしがらみというのもあるわけです。それも踏まえながら南風原に出来る取り組みというのを今やっています。35,000人というコンパクトなまちだからこそ、人と人をつなぐとすごい変化が現れる。35,000人だから変化が目に見えるわけです。そういうところもあって、実践事例としてお三方にお話していただきました。それでは何か質問がある方いらっしゃいましたらどうぞ。

島　袋：事前に翔南小学校のHPを見て調べて思ったのは、一番翔南小学校で力を入れていたのは平和教育じゃないかなということです。平和教育のカリキュラムがかなり紹介されていて、そして平和教育のための研究グループの組織ができていて、実際の現場の藤原さんが授業している写真も載っていました。それで、翔南小学校の平和教育は、基本的に先ほどおっしゃられたように、一年生から六年生までが、ある程度体系的にカリキュラムが作られていて、そして一番力を入れているのが平和教育を、戦争では苦しいことがあります、辛いことがあります、だけじゃなくて、平和を創造する主体とならないといけないということです。その主体性の育成に比重が置かれていました。これから平和な社会を作る主体と平和な地域社会、平和な南風原づくりというのが見えました。これが一番のコアカリキュラムというふうに見えたんですが、今日は、その話がなかったんですが、どうなっていますか？

仲　村：そうですね。平和というと、戦争だけじゃなくて、もっとお互いを大事にする、そういう平和教育があっていいんじゃないかと。確かに戦跡や壕を活用した平和教育ができるということも一つの取り組みではありました。前年度に道徳のほう、道徳教育の研究もやっていたものですから、県のほうから平和教育の指定研究をやってみないかとあったときに、せっかく南風原に平和に関する施設というのも揃っているし、それをやりながら、子どもがお互いを大切にする心を育てたいというのがあります。仰々しい平和、戦争、じゃなくて、お互いに思いやりのある、学校づくりをしていこうというのが大事です。「平和教育」と言っていなくても、実際は平和につながる教育をずっとみんなやっています。「私たちは平和教育を全然やっていませんよ」と言う方も多いのですが。でも、普段実際やっていること、それはとても平和につながっているんだよ。我々がやっていることは、特に平和教育についてやろうという意識がなくても、ここらへんで平和につながっているよねと、お互いが確認しあうこと。今後もずっと本校は平和教育をそういう形でやっておけるよう、カリキュラムに組み入れ、教育課程ができればいいんじゃないかということで取り組んで来ました。

今後残していくために。研究のための研究でなくて、自分たちは、平和教育でこれやってい

る、ずっと伝統として続けていこうと。そのためには、ここでやるんだよ、こういうことにこういう人材が活用できるんだよ、ということを確認するという意味でやっていました。

前　城：研究教育校に３年間指定されているのでHPにも特化して載せたってところですよね。

島　袋：なるほど。要するに、御所南小学校にしても本土のほうの地域運営学校とか、基本的に学校の独自のカリキュラムで、この学校はこんな子どもを育てたいんだ！だからこそ、こういう新しい制度、新しい支援本部を導入するんだという独自のカリキュラムがあって、そのためにやるっていうのはあります。それで、地域のアイデンティティとか地域の文化を継承する子どもと、その発想で子どもを育てるためのコアカリキュラムが必要になるかと思います。平和学習で研究校として指定されたら、多分、別の方でも通じていて、今おっしゃられたお互いを認め合って尊敬しあう関係、その関係作りをする能力、これも信頼ある人間関係を結びつける能力と同じだと思います。こういったものをメインの目標として、名称は違うんですけど、「平和教育」なりなんなり、全てこれは方向性としてあるんですよということで、一貫性があれば発展させるということかと思います。今はなんですか？せっかくの素晴らしい取り組みを継承してほしいなというのがあるんですけど。

佐　藤：実際の教室に支援に入るということに関して、先生方の抵抗って強いんじゃないかという印象があります。僕がアメリカに暮らしていた15年位前、息子が小学校の頃に、ボランティアで入ったんです。そのときに驚いたのが、親が採点をやっていたんですね。私は後れちゃった子に算数を教えるボランティアをしていたんですけど、そのことを当時、論文に書いたらば、自分の友達とか先輩にとっても驚かれたんですよね。アメリカってやっぱりボランティアに関してはすごいんだな、と言われました。一般的な日本の学校ではそういうのは難しいんじゃないかと、そういう先入観と、それから実際に、多分採点となると他の親御さんも嫌がる人が出てくるだろうしね。それほどの壁はどういういう風に乗り越えてきたのかなというのを、何かしら苦労されたこととか、工夫されたこととか。先生は、そもそも嫌だったんじゃないかとか。その辺はどうだったんでしょう？

儀　間：そうですね。採点に関して言えば、100点満点本テストの採点ではないんです。この人たちがやっているのは小プリントなので、実際に成績を左右するような、例えば、中学校の期末考査とか、そういうものには関わってないんですね。やっぱりボランティア、サポート、あくまでもサポートとして、人手が足りないところをサポートしてほしいっていうのが、英語・国語・数学・算数では大きいです。ボランティアが、主になって授業するということは、主要教科ではあまりないですね。

先生方の抵抗というのは少し感じます。最初は学校に入りづらかったんです。というのは、私は子どもが卒業してしまってOBの立場というのもあるでしょうし、反対にもう一人コーディネーターの赤嶺さんという方は現在、小学校・中学校に子どもがいて、現役の保護者なんです。だけれども、彼女も自分の子どもが通っている学校には行きやすいけど、もう一つの学校には行きづらいよね、と。私はもう関係ないから入りづらいよね、ということから、やっぱり学校は敷居が高いという壁は感じました。だから最初の１年は挨拶運動です。顔を売る。あやしくないよと、身分証を下げて、コーディネーターです、と。で、申し訳ないんですけど、感じたことは挨拶できない先生がたくさんいらっしゃいます。子どもたちに挨拶しなさいと言っ

ても、自分がよそから来た人に挨拶しない先生もたくさんいます。こんなところだったかな（笑）と思いながらも、マイナス感情を持っても仕事はできませんから、とにかく挨拶をして、顔を覚えてもらって、役に立つんだよというところを分かってもらうのが最初でした。

それと、私たちコーディネーターは、「こんなことできますよ！こんなこといかがですか？」という営業と、あとはやっぱりトップダウンですよね。もうこれは、町の教育委員会として、この事業を採用したから使いなさいというのが来ていますから。なんらかに使いなさいということで校長先生が下して。だけど、それにすぐ反応する教員もいれば、反応しない教員もいます。それはそれで問題ないと思っています。２年も３年もやっていれば事業が浸透してきて、活用したら得するというのが分かってもらえてきています。教師がやって得したと思えるように、私たちも心がけたいので、先生たちの声を聞くのをとても大事にします。本当に、必要だからニーズをあげてくださっているんですが、どういう考えを持っているのか、というようなことを丁寧にやることで拒否反応が少しずつ消えていくのかなというのも実感です。それで、やってみて、これは北丘小学校の教頭先生がおっしゃっていたんですが、「確かに、地域の人を学校に入れるというのはリスクもある。あまり入れたくないと思っている教師も確かにいます。だけど、地域人材活用というのはそういう思いを外してでも入れる価値がある」とはっきりおっしゃったんです。それだけ、刺激のある授業が実際に子どもたちにできる。教師では教えられないことを外部の人がゲストティーチャーでもいいし、プールやミシンのサポート支援でもいいし、人手が多いということで、学校はプラスになるんだということを教師は知らないといけない、と。一回知った教師はどんどん使います。だから、最初はやっぱりハードルはありましたけれども、やっていくことによって浸透していって、１年目、２年目、３年目と増えてきます。最初の学校で使った先生が転勤して、新しい学校でまた新たなニーズがあがってくるというのも今体験中です。

島　袋：南風原町のやり方は、学校支援地域本部を町の１区画とみて、そこを小・中合わせて６つの学校のための本部にして、そしてコーディネーターは中学校区で、２人で３校ずつ面倒見るという方法ですよね。もう１つ、もっと細かいやり方をしたら、学校ごとに学校支援地域本部を置いて、学校ごとにコーディネーターを置くというやり方もあると思います。

南風原町のような広域的なやり方で、１人で３つの学校を回すってむちゃくちゃ大変だなと思うんですけど、例えばそれをやるメリットもあるかもしれない。例えば、小中の一貫校を将来的に作るというのであれば、この体制のままいったほうがメリットがあるのかなとも思うんですけど、逆にきめ細かにもっと学校と地域とをつなぐつもりであれば、学校ごとに学校支援地域本部を置いて、学校ごとにコーディネーターを置いたほうがいいように思います。

現在の南風原町のやり方では、ちょっと過剰というかコーディネーターの仕事が多すぎないかと思うんですけど、今まで３年間やってみて、今後はどうしたほうがいいと思いますか？今までの方式がいいのか、もっと細かく分かれたほうがいいのか。それぞれメリット・デメリットがあったら教えていただきたいのですが。

儀　間：実際には過重になってきました。それはメリットとしてそれだけ浸透して需要が出てきたということで、商売繁盛有難いことなんですよ。（笑）なんですけれども、コーディネーターの決められた時間、決められた給与の中ではもう間に合わないというパンクの状態です。しかし理想

は、これ私の個人の意見ですけれども、学校に１本部あって、コーディネーターが一人いる状況の方がいいと思います。しかし、南風原町がどうするかは分かりません。おそらく、あと何年かはこの状態で行くと思います。業務として大変ということもそうなんですけど、やっぱり学校１つ１つに置いたほうが、もっと効果が上がるということが、おそらく出てくると思うんです。私たちがこの声をあげると、考えてくれないかなというのはあります。

でも、一番役場として考えないといけないのは、財政ですよね。コーディネーターを今、２人なのが６名置くとしたら、どうしたらいいかというそこをクリアしないと、行政は動けないと思うんです。そこは私たちが考えるところではないので、考えてもらうためにも私たちは、実績を積んでいるという状態です。本当に、理想はそうです。そうすると、先生方ももっと打ち合わせがしやすい、活用しやすい。それにコーディネーターが校区内に１人いるとなると、もっと地域に深く入っていけるんです。もっと密になって、そのコーディネーターも私のような OB ではなくて、保護者が務めればどんどんどんどん下から上がってくる。また、コーディネーターは１人じゃないんですね。実際、役職としては私たち２人なんですけど、コーディネートは、みなさんしているんです。区長さんもしているんです。先生もしているんです。また、１回ボランティアに参加した人が次の人を連れてくるので、この人もある意味コーディネートしていると言えるんです。つまり、みんながコーディネーターになっていて人が増えるのかなと。だから、学校に１人いれば、教員と密につながって、地域と密につながれる。理想はそれだと思います。

仲　村：私も最初、前城さんたちから話があってやろうと思ったときに、まずは翔南がモデルとなってやろうじゃないかということだったんですよ。それで教育委員会も呼んで、勉強会したときに、教育長が「これ素晴らしいな。これは町全体でやろう」ということになって、結局、町全体の６校でやることになりました。そして中学校校区ごとに２名のコーディネーターを配置して、学校支援を進めることになりました。

私としては、学校の PTA 事務職にコーディネーターをやってもらうほうがいいと思っています。PTA 事務にコーディネーターの手当をあげて、PTA 事務を兼ねながらやってもらう。そうすれば、コーディネーターがいつでも学校にいて、先生方といつでも連絡が取り合えます。こんな人材がほしいんだけど、といつでも相談できます。コーディネーターも、担任の要望を直に聞けます。私としては、各学校に１人置いてほしいと、私は要望として出していたのですが・・・。今、職員とコーディネーターの人が直接話しをする時間はすぐには取れないものですから、教頭先生と相談して、コーディネーターが来たときに、こういう人がほしいみたいな形で中継してやっています。まどろっこしいですよね。担任としては、やっぱりすぐ相談したいという部分がありますから、これは今後解決する必要がありますね。

校長会の研究大会のときに、南風原町ではこういうことやっているんですよ、と学校支援地域本部事業の紹介をしました。ところが、沖縄市では見事に各学校に１人ずついました。

島　袋：それって、１つ１つの学校に１人のコーディネーターが入れば、もしかしたらカリキュラムの編成のときに最初の段階で、もっと地域の方々の力を活用した、地域の子どもを作るためのカリキュラムというのが、コーディネーターと相談しながら２月３月に綿密に作っていくことができるんじゃないかなというイメージがすぐ沸くんですけれども、それはどうですかね？

儀　間：ありえますね。２月、３月に、実際にお伺いに行きます。もうなるべく早め早めに先生たちのニーズを知りたい。教師って忙しいから、明日明後日になって、ポッと言ったりするんですね。これって、世の中通らないんですね。悪いんですけど。でも、前もってこちらが情報提供すれば、教師の方から依頼も相談もできるので、そのようにしています。特に総合学習というのは、年間通して取り組むところが多いんですが、中に平和学習も入るし、キャリア学習も入るし、人権も入るし。年間計画で、この場面で地域人材活用、というのができれば、先生方にとってもよい授業ができるだろうし、そこにお手伝いできればな、って思ってはいるんですけれども、なかなかそこまではいけないかな、と。でも、やっぱり３年目にして、少しずつですけど、入り込めている実感はあります。

佐　藤：お話ずっと伺っていて、これって誰でもできる仕事じゃないですよね。儀間さんだったからできたことっていうのはすごく大きいと思うんですね。各学校で１人置いたからといって、同じように地域に入っていけるかというと全然違う話だと思います。だから、コーディネーターがどのように力をつけていくのかが、次の課題というのは、そういうことなんだろうなと思いました。今まで儀間さんたちがやってきたところを、そのまま誰でもできるわけではないと思って聞いていました。そこが次は難しい課題になるのかもしれないなと思いました。大変ですよね。

前　城：儀間さんももともと持っていた資質があるんですよね。しかし、儀間さんみたいな人、いるんですよ。もっといるんです。だから４名探すのは多分無理ない。要は、この制度を入れるときに、僕と校長も大宜見さんも狙っていたのが、３年目なんです。もう２ヵ年やった、相当頑張って。あと１年やれば、スーパー地域リーダーなんですよね。その方々を、是非 PTA 事務に入れたいというのが、僕らの一致した願いなんです。この方が、PTA 事務やるとどんなことが起こるかというのは今話された通り。次に、経費をどうするかというと、これ簡単なんですよ。今、２人いますよね。あと１人を増やすって、実は問題ないんです。この一人の半分は PTA の持っている予算で払える。あと半分を行政が出せば、１人１日で頑張れるわけです。それで、あと１人人件費増やしたら６校ですよ。あとの２ヵ年くらいでそういう人たち、儀間さんの次に来る人たちを増やしておきたい。もうちょい育てておきたい。あと３名増やしておけば、予算がついたときには散らばれる。ここは行政が考える部分です。どうやってやりたいかっていうのが。ここは、儀間さんとかコーディネーターの考えることじゃないです。どうやって地域に還元していくかというのは、大事なところですよね。

もう一つ大事なところは、信頼関係です。学校では最初先生方の中にすんなり入っていけません。これは、地道にやらないといけないです。地道に活動しながら信頼を得るという感じです。これは最初の課題だろうなと思います。我々の PTA だって、信頼関係作るのに３年かかりました。今は先生からも色んな相談受けますが、最初の１年は総スカンでしたからね。

新　垣：私達もちょうど２年前に「トトロの会」という組織を作って、当初は、発達障がいの子どもたちのためでしたが、今は生活・学習支援になっています。先ほどからあるように、色んな要望があります。今年から３年目に入り今まで１校だったのが、津覇小学校、中城小学校の２校になって、どうやって人材を集めようかが課題です。コーディネーターがいらっしゃるということで、すばらしいと思っています。私たちの活動を先生が「(外部支援は) いいよ」とアピール

していただいて、今まで完全に拒否していたのが、学習支援、総合学習の遠足の時間にほしいとか、三味線を教えてほしいとか、どんどん要望が来るので、調整するコーディネーターがいればと感じています。南風原では、ちゃんとそういう方がいていいなと思って、とっても参考になりました。ボランティアの数が20名くらいと限られ学習支援で精一杯です。それをどのように拡大して行くかが悩みの種です。その辺はどうしていますか？

儀　間：ピンポイントでニーズに合った人を探しに行きます。例えば、三線教える人が必要であれば、老人会の三線クラブとか、公民館のサークルとかですね。

新　垣：人はすぐ集まって来ます。それをコーディネートする人がいない。ボランティアではできないですよね。コーディネートする人の費用がないと、逆に行政の責任だとは思いますが。南風原町はよくやっていると思いました。

前　城：今、費用と言うと、今の体制が税金投入してやっているじゃないですか。そういうこと？

新　垣：そうですね。継続的にやる。

前　城：そこがやっぱり理念や哲学なんだろうと思います。何のためにやっているのか。当然、学校の支援なんですが、もっと上の高いところを極めていくと、地域の安全、安心につながる。その理念をしっかり捉えていると、学校もよくなる。地域もよくなる。

新　垣：今までの無償のボランティアは長続きしないと思います。やはり核の部分は、ある程度の費用負担で運営しないといけないですね。

前　城：実際、我々が支援的なものをやるときに、この相関図の中でいえば、８番。賛助会員をやるときに参考にしたのが和田中学校なんです。結局、議論を突き詰めていくと成功事例は和田中なんです。和田中学校は、有償ボランティアと完全なボランティアを組織作って、これが学校の中から外に出ているんです。学校の中じゃなくて、PTA でもなくて、組織としてある。こういう理想系があったので、我々はその走りとして試験的に５年前に、賛助会員制度を作ってやっていこうと思いました。その２年後に南風原町が文科省の補助を受けて、実際今始まっています。最終到達目標をどんなことにするかというのを、ちゃんと見ていないと、横に揺れるんですよ。遠回りするんですよ。遠回りも経験でたまにはいいかもしれないが、しっかりしたバックキャスティングでここだ！ということで、まっすぐ突き進むほうがいいですよね。

儀　間：南風原町の場合、支援本部立ち上げの目的は、地域づくり、人間作り、安全・安心じゃなくて、学力向上です。ちょっと残念だけど。今はそれが主ですね。教育委員会は。

大宜見：先生たちのプレッシャーはすごい。

仲　村：どれだけ学力が上がったか、メリットを出さないと予算あげないよ。(笑)

新　垣：私も地域の子ども会の役員ですが、野球部やサッカー部の子どもたちが抜けてしまうと、子ども会の活動が一気にできなくなってしまいます。特に、野球部が半分くらい占めているので、野球部が抜けると、活動できなくなります。私は野球の会長をさせてもらっていますので、地域活動のある日は、野球部の活動を中止させて大会を組まないようにしています。でも、地区大会とかがあるとどうしてもできないこともある。

第３土曜日が地域の日になって、家庭の日は第３日曜日です。これは間違っています。教育委員会に行って「第３日曜日を地域の日にしてくれ」と要請しました。早速、青少年の住民会議総会で、中城では第３日曜日を地域の日に設定し、第３日曜日は、小学校、中学校、高校の

部活動を停止して、地域の活動を入れ子ども会を活発にしようと提言させてもらいました。それを是非やりたいなと思っています。子どもたちを地域に戻す。クラブ活動をやっている子たちをどうにか地域に戻す取り組みをどのようにしたらいいのかなって。

大宜見：島尻は結構盛んですよね。体育館を使用させない。行事を持たない。

仲　村：家庭の日は行事をやるなという。

新　垣：第３日曜日の家庭の日は家庭に戻せ！なんですよ。地域に戻すではなく。

仲　村：でも、僕は地域・家庭の日だと思っているんですけどね。

佐　藤：月に２回もそれやらないと！あと全部野球っていうはすごい話ですね。

島　袋：野球練習しすぎ！（笑）

儀　間：子どもが中学になると、休みの日に家にいられたら困るという親もいます。部活していてほしいという親も実際にいるんです。家にいてもだらだらしているから、こんなくらいだったら、学校に行って部活させたほうがいいという親も実際に今は多いです。

佐　藤：結局、そういうことになっているんですよね。部活がね。ちょっと根本的におかしい。

儀　間：宮平の子ども会にいますが、子ども会の役員って六年生の親がなるんですよ。昨日たまたま公民館で集まりしたので顔ぶれを見たら、野球部の親、サッカー部の親、帰宅部の親、満遍なくいました。意識したのか、多分、意識したんでしょうね。部活ばっかりして、地域活動に参加しないと。だけど、この部活動生を除いたら成り立たないと当事者として思っているので、おそらく意図的にやらんといけないと。だけど、部活だけでは足りないですよね。部活だけでは地域活動がおろそかになるので、女の子の親とか帰宅部の部活していない親とかが一緒に役員になって、大会のスケジュールを見ながら、子ども会のスケジュールも見ていって、お互いにやっているんだなというのを、私たちの時代からやっていましたけども、何年かぶりに顔ぶれ見たら、あ～やってる、と思ってね。これだから、部活だからできないってあまりこう区切って考えなくてもいいと思います。野球部が抜けてもサッカー部がいて、帰宅部のお母さんたちがいれば成り立つわけですから、「じゃあ頑張っておいでね。じゃあ来月はあんたたち頑張ってね」でもいいわけですよ。

島　袋：僕は少年野球やっていましたが、僕らが子どものときは「○○小学校野球部」と言わなかったんですよ。全部、地域の人が監督していて地域の野球クラブだったんです。沖縄の小学校は全部そうでした。いつから「小学校○○部」になっているんですかね。昔は、全然学校との関わりってなかったんですけど、今は学校の先生が顧問とかコーチとかやっているんですよね。

仲　村：これもまた地域力の弱さが影響している。地域だけでチーム作れないから、合体してチーム作ろうとか、学校単位でやるとかね。そういうのもあるし、翔南の場合は、山川という字だけは山川の単独チームで専用のグランドがあって、字喜屋武のチームはよその字から入っています

島　袋：部活というのは、便宜的に言ってるだけ？

儀　間：中学校の部活とは違います。

仲　村：バスケットだけは教員が立ち上げたのがほとんどだけど、今はもう地域の方が翔南も指導しています。

前　城：この方たちが地域に貢献しているのは間違いないわけですから。ただ、この場所で今話に出たことを言ってもらったほうがいいと思います。「地域の子どもだから地域にも、ということを一

つ頭に入れててくださいね」くらいのことを教育行政が言うと変わるんですけどね。

島　袋：学校で野球クラブとか、週に５日間くらいやるんですが、これってどう考えてもやりすぎだと思います。多くても週に２回くらいだということで、貸し出し禁止とかできないんですかね。

新　垣：第３日曜日は練習をするな、と言っただけでいじめられますからね。（笑）

佐　藤：それでどうなるかというと、私のところの学生も中学・高校までは何かやっていました、というのがゴロゴロいて。それで「今は何かやっているの？」と聞いたら、「今はもう絶対やりたくない」っていうのばっかりです。草野球楽しむっていうのも物凄く少ない。あんなんもうやだって。特に男子学生なんかはもういいって。

前　城：スポーツ活動が定着しているので、これを変えるのは不可能だと思います。逆にこのスポーツ活動しているから親がつながっている事例も間違いなくあるので。そこをしっかり見極めて大切にしていかないといけないと思います。

字が弱まっているということは間違いないんですけど、字単位を見る時代じゃなくなっていると思います。もう校区ですね。翔南なら翔南小学校区。エリアで見て、どうするかという時に、一つの手段が今コーディネートなさっている人と人とをつなぐ作業をもっと密にやっていくと見えると思います。字でも見れないから校区で見ましょう。だからこの方向が今、南風原がとるべきものなんだろうと。最後の極みが安全・安心なんですよね。これは制度としてやらないといけない状況があるんです。那覇市もそうです。沖縄市もそうだし。やっぱり離島というのは、そういう制度いらないんですよね。つながっているという感じです。このあたりどんな感じですか？

仲　村：ほとんどみんな、いとこであるとか、お互いのつながりを分かっているからね。

前　城：課題が違いますよね。

儀　間：先週、研修会をしました。そのときに、同じグループになったチームが久米島でした。旧仲里村が支援本部を立ち上げたということで、仲里村の方が来ていて、参加者の区長さんがコーディネーターをしていました。小学校の教頭先生、中学校の教頭先生という参加者でした。それで、人がいないと言っていました。島だから、みんなで見ているんだろうな、課題は大学生がいなくて学習支援に人材として欠けるくらいなんだろうなと思っていました。だけど、実際に教員が言ったことが、この小学校の先生が、蚕を飼っていて、これから生糸を取りたいんだけど、誰に相談したらいいか分からないって言うんです。そしたら、他の先生が、「何で隣につむぎ会館があるさ！」って。隣につむぎ会館があるのに、この先生はそこに行って「教えて下さい」って言わないのかなと、不思議に思いました。「人がいない」ということがどういう意味なのか。本当にボランティアが足りないのか、コーディネートするアイディアがないのか、どっちかなのかなと思ったんですけれども。いるかもしれないけど、頼みづらいとか。近いが故に、１回やったら、しょっちゅう言われるから負担になるんじゃないかっていう、近いが故のそういうのもあるみたいです。

南風原に津嘉山という地域があるんですけど、そこは１つの字で１つの学校を持っているんですね。一番、支援本部要請の量が少ない。なぜならば、すでにパイプがあるんです。だからわざわざ支援本部にあまり頼らなくてもいいんです。もうすでにあって、コーディネーターを通さなくても、色んな人が入ってきてるから、支援本部の実績としては残らない。

島　袋：将来的には、それが一番望ましいのでしょうか？

儀　間：そうですね。だから、先生が直というのを受け継いでいければいいと思います。そして、頼まれた人も当たり前に来てくれたらいいですよね。

島　袋：疑問があるんですが、日本の学校のシステム、教員養成課程の中で地域をコーディネートする力なんて、何も重視されてないです。カリキュラムとしても教育学部でも何もほとんどないです。「地域との協働関係が重要ですよ」とは口で言うけれども、具体的に、誰かにお願いして、人と人とをつなぐ、誰かの力を合わすとか、信頼関係を結んでいくとか、そういうことが授業では一切ないです。教員になっても学校の中は閉じていて、基本的には、そういうことやらなくても教員としての仕事は全うできるというわけです。例えば、これを校長先生だけがやると言ったところで、教員の側としては積極的にやるという気が起こらないように思います。最初は。これを恒常的にやっていくためにはどんな制度が、どんな仕組みがあればできるようになると思いますか？例えば、宇栄原小学校の取り組みは、校長先生が変わったらもう終わりなんですよ。一切なくなってしまいました。そんな感じで、今のところ継続してやるというシステムが、教員を普通に育てていってやっていたら、やらなくなるという可能性がとっても高いんですよね。地域と関わるコーディネーター、意識して関わる教員、そして学校の向上的なシステム、これをやるためには何をすればいいのか。そこをお聞きしたいです。

仲　村：一応、「地域連携担当教員」というのは配置しています。だからそこを中心に、全職員と学校支援ボランティアで来る方々との交流会みたいなものを定期的にやる場が必要だと思います。それをやっていて、学期の終わりか、次の学期の初めなどにお礼を伝えたいものです。顔合わせすることが大切かなということと、また、職員に地域との連携力を高めるためには、せめてPTAの役職の方たちとの交流会ももてたらないいですね。PTA役員の方たちとつながることができると、そこから親とつながることができる。

熱心な教員の方が、宜野湾から通っていました。是非、翔南小校区内に引っ越して来ないか、もしくは、宜野湾市の小学校を紹介してあげようかと伝えていました。そういうふうに、近くに住んでいて、普段から地域の人たちを知っているということが大事だと思います。そういう意味で人事権が必要だと思います。

島　袋：校区内に住んでいるというのは決定的に重要なんですか？

仲　村：重要ですね。

儀　間：小学校・中学校では、校務分掌で「地域連携担当職員」という職員がいるんですけど、今のところ私たちは全く関わっていません。窓口は教頭先生。なぜかというと、地域連携担当は授業を持っていらっしゃるんですよ。だから打ち合わせする時間がないんです。どうにかこの先生と仲良くなって、もっといい活用ができないかなというのを、私たち町の実行委員会の時に出したことがあったんですけど、参加者の校長先生から大反対されました。やっぱり「授業を持っていて担任も持っているから、忙しくてそんな暇ない」と。「その点、教頭は電話対応しやすいから、教頭を窓口にしてくれ」と言われました。さっき言ったようなPTA事務のような常駐の方がコーディネーターを兼ねていれば、地域連携担当の先生が担任を持っていても授業を持っていても、この先生とちょっとの空き時間で連絡が取れます。そうすると、この先生も、地域連携としての役割が果たせて色んな経験が積めるんじゃないかなというのはあるけれども、

活用されていないというのが現状です。県の担当の人は、「是非、教頭ではなくて、地域連携担当を活用してください！打ち合わせしてください！」とは言うんですけれども、現場は違うんですよ、ということです。織田裕二じゃないですけど。無理ですよ。授業しているのに、こんな打ち合わせなんかできないですよ、と。でも、私たちからすれば、地域連携だから何かコンタクトを取らないといけないんじゃないかな、この先生と仲良くしたほうが得じゃないかな、というのはあります。それが常駐のコーディネーターがいれば、教頭の負担も減ります。校長先生、教頭先生というのは上司ですから、地域連携の先生がまた相談したりすれば、もっといい支援ができます。校長・教頭が、今どんな授業の中で地域人材活用が進んでいて、今度どんな人が入るかというのは、是非分かっていたほうが良いと思います。すべて、コーディネーターと担当ばっかりではなくって、ポイントで管理職が知るっていうのは必要だと思います。

私は打ち合わせにFAXを使います。コーディネーターのパソコンはメールがつながってないので。それで、お伺いや打ち合わせの結果なり変更なりを行います。FAXを使うときは、必ず、教頭先生と地域連携担当教員と、学年主任の連名にするんですね。そうすれば、否が応でも、どんなに忙しくても目を通してくれるので。外に人を頼む。でも、学校は「すいません、できなくなりました！」って急にキャンセルが出る場合もあるんです。そうなった場合に、「人にものを頼んでおいて、こんなんじゃ困るよ！」という管理職もいれば、「仕方ないね」という管理職もいるんです。簡単に使いたいというのも分かるんですけど、そこは人間ですから人間関係を大切に考えると、私たちは地域側に立つので、大事にしてもらいたい。大事にしてもらって、長いこと使ってもらいたい。だけど気楽に使ってほしいし、ボランティアにも気軽に来てほしいというところで、お互い良い関係を続けていくことを考えるとルールは必要かなというのは、日々感じるところです。

島　袋：校長先生とか教頭先生とか、地域の人が変わって継続が厳しくなったとか、変わったけど、上手くいっているとかそんなことあります？

儀　間：ありますね。「地域の方がこんなにも、協力しているんですね。有り難いです。これからも宜しくね」という方もいれば、「今年はこの集まりは持ちません」という方もらっしゃいます。

島　袋：その場合は関係作り直しですか？

儀　間：いえいえ、そこにどうやって切り込んでいくかですよ。だって、やったほうが得ですから。

前　城：だから、こういう地域のコーディネーターの戦略が必要なんです。校長で変わりますからね。

儀　間：まず、だいたい学校経営方針というのには、必ず地域連携が組み込まれているんですね。だから、全く地域人材活用がなしになるということは、学校経営として有り得ないと思います。

前　城：一番大切なのは、重々話しているんですけど。学校の先生の立場、立ち位置になれるかなんですね。これが、なれなかったら、喧嘩ですよね。

佐　藤：だから、さっきの話に戻るけど、今の話で最初に対立する話じゃないって言ったけど、なかなか出来ることじゃないですよ。だって、今年はこの話し合いは持ちませんって言われたら、腹が立つのは当たり前。

儀　間：これは人間として同じだと思いますよ。何でやらないの!?と言われた日には、誰だって腹立ちますよね。例えば誰だって、「隣の奥さんは毎日化粧して美味しいご飯作っているのに、何でお前はできないんだ!?」と言われたら、もうこれ離婚問題でしょ。（笑）それと同じことだと思うん

ですよ。前の校長先生はいい人だったのに、何で今の校長先生はやらないの!?と言われたら、人間ワジワジーしますでしょ。だから何も難しいことじゃなくって、この人はこの人で、やっぱり仕事として一生懸命取り組んでいるんだから、それを私たちはサポートできる環境を、できるものを提供できればいいと思うんですね。

コーディネーター研修会でも、たまに出るんです。「ここはいいよね、うちはだめよ。全然、先生の理解がなくて」って。でも理解がないからと言って、ずっとこの人を攻めていたら何も始まりません。理解がない人もいて当たり前だよ、と。新しいこと始めるというのはそういうことじゃないかな。まずは、理解してもらうために、何ができる？挨拶が簡単じゃない？異文化交流だって挨拶から始まるんだから。私を知ってもらって、使ってもらったらいいんだから、じゃあ私を知ってもらうために挨拶すればいいじゃんという感じで。だから、コーディネーターも「何かしてあげるのに、私はこんなにやっているのに」と思うと失敗します。

新　垣：今、沖縄県の休職する先生方が他府県に比べて物凄く多い。４月から赴任してきた先生がすぐ休職して、新しく来た先生もすぐ休職してしまうこともあります。学校の先生方が気軽に何かあったら休んでしまうというこの環境は、学校現場にいてどう感じるのかお伺いしたい。私たち外部の人間では全く理解できない。連続して休むって言うのは何なのか。その辺の学校の状況を知りたいです。

仲　村：保護者から色々な要望があります。この先生は、家庭学習多すぎとか、逆にまた全然家庭学習させてくれないとか。親の考えも色々あるものですから、それを担任に全部ぶつけてくると、担任はせっかく一生懸命やっているつもりなのに、ショックで意欲をなくしてしまう。だから今は保護者の要望はまず管理職に回してほしいと思います。

新　垣：要望の厳しい東京よりも沖縄県の方が一番多いというのがショックですね。

仲　村：結構色んな親が多くて、渡嘉敷でもそうでした。あんな小さい島でも校長に泣きついてきたり、親同士の対立で批判されたり。幸い翔南小学校には、町で雇っている心の相談員や教育相談の方が定期的に回って来ます。専用の部屋で相談を行っている部分もあるので、その相談員が親と話して親の話を聞いて、「親はこう思っているみたいです。担任に言ってもらえますか」とクッションを作っています。これを直にやってしまうと、教員はノイローゼになってしまいます。担任にも、親から苦情があった時には、この苦情をストレートに言うんじゃなくて、「○○先生がいつも学級を明るくして喜ばれているみたいだよ」と褒めながら「実はね、こういうこともあるから、このことには注意してね」とか工夫します。教師から親に伝える場合にも、先ず今日は褒めて、そして後日に「こういうことで困っているんですよ」と注意を伝えなさいと。そんな伝え方で親とのトラブルをなくすというのが、教員を休まさないことかなと思っています。

儀　間：それは私もありますね。学校に出入りしているので、私にクレーム言う人もいるんですね。「あの先生、問題じゃない？」とか言うんですよ。私にはコーディネーターという名前がついているので、特別支援コーディネーターと勘違いされて、自閉症のお母さんが先生の扱いが悪いということを言ってきたりします。話を聞いていて、「ごめん、コーディネーター違いかもしれない」と答えたり。「だけど、あなたがそうやって思っているんだったら、直接、先生に聞いてみるほうが解消になるかもしれないよ。だけどね、教員だって人間だから最初から高飛車に怒りモードでいくと、売り言葉に買い言葉になってしまうから、それはちょっと言い方の問題もあ

るかもしれない。教員も子どものために良かれと思って働いている人だし、親も子どもを良くしたいと思っているんだから。あなたは今、怒っているけど、お互いの考え方は一致しているんじゃない？お互い子どものことを思っているわけだから、子供が心配なんだけど、先生どうしたらいいですか？ここが気になるんですけど、というような言葉かけが大事だよ。どんなに怒っていても、ちょっとあなたがボルテージを下げて言えば、先生も人間だから、そうだねっていうテンションになるかもしれないよ。まずは、伝えたいことを正確に伝えるために、ゆっくり、今ちょっと私に愚痴って怒って、怒りモード冷ましてから、電話とかお手紙とか書いてみたら」って。ここでも私、コーディネーターしているんですよ。本当に色んな話を聞きます。

学校に入るということは、学校のことを知ることにもなるので、なるべくいい情報を伝えるようにしています。「○○先生、こんなに頑張っていたよ」とか。子どもも「○○ちゃん、とっても一生懸命習字書いていたよ」とかね。うちの隣の子は、家でしょっちゅう怒られているのが聞こえるんですよ。（笑）だけど、やっぱりこの子にとってはこの一面だけじゃないので、その子が学校で頑張っていた様子を家族に話します。私は学校で先生の違う面も、子どもの違う面も色んな面を見るので、学校の良い面を見て色んなところに吹聴する。子どもの良い面をみて、保護者に伝える。というのを意識的にしています。

前　城：素晴らしいコーディネーターですね。

儀　間：喧嘩したら始まらない。

宮　里：私も大学のコーディネーターをやっているんですけど、コーディネーターというのは、お見合いのおばちゃんと一緒。お見合いのおばちゃんって、「この人上等よ」としか言わない。だから、基本的にプラス思考じゃないとコーディネーターできない。マイナスのイメージを少しでも言うと、相手も同調して、これは悪い！ってイメージがどんどん膨らんでいくので、プラスのイメージでいくというのが大事だと思います。特に大学の先生方とは、「先生の研究を使えばこのお菓子ももっと甘くなって上等だね。それをこの企業と一緒にやってみませんか？」という話をして、マッチングをして、新しい商品を作ったりするんですよね。だから今の学校と地域とをコーディネートするというのも、やっぱりお互いのいいところを紹介しあって、一緒に地域をよくしましょうとか、一緒に子どもたちの笑顔を増やしましょうという一つ方向性を見出すと、一緒に乗っかりやすいですよね。まさしく、コーディネーターというのは素晴らしい仕事だと思います。

儀　間：黒子に徹するんですよね。主役は地域人材と教師だと思っています。学校支援といっても特別な人でなくてもできるんです、誰でもできるんです、と伝えることが大事だと思います。充さんが再三言っている安全な地域を作るためには、というのがあるので、自分では何にもできないのに、という方でも必ずお役に立っているということをわかっていただきたい。お花作りや、趣味の書道ができる人もいます。来てくれるだけでいいんです。学校に来てくれて、子どもに顔見せてくれるだけでいいんですよ、と。そしたら、子どもはあの人が自分を見ていてくれたってことで、背筋がしゃんと伸びて、普段ニーブイしている子どもでも、今日一日頑張ろうと思うんですよ。そして、地域に帰ったら、あの人が見てくれたと、また頑張れるんです。だから、あなたも声けしてくれますか？って。特別なことじゃなくて、学校で子どもを見てくれて、学校からさよならって門を出たときに、外で見てくれる一人になってほしいんです。見てくれ

るだけでいいので、来ていただけませんか？と言うと、どんなに忙しい人でもだいたいは来てくれます。

新　垣：でも、このようなコーディネートする力を大学の生徒たちにどうやって教えていけばいいのか。

島　袋：ファシリテーションの力ですよね。僕は教員養成課程で授業をやっています。しかし、教員養成課程の正規の授業で文部科学省で単位認定しようとするとそのような授業は撥ねられるんで、教員免許に必要ないとして撥ねられる。だから、教員免許に必要ない授業でやっています。(笑)

儀　間：今、学習ボランティアで井上先生のゼミの子たちがいっぱい来ています。是非、教員養成課程の子どもたちに学習支援してもらいたいので、今日スカウトできないかなと思って来ました。先生から声かけしていただけませんか？学校の先生や退職教諭が大学生のことをものすごく評価します。教育実習期間が２週間では足りないって言うんですね。だからボランティア活動が大事。学校に足運んで、実際に子どもと接して教えるっていう経験をいっぱい踏んだ子が教員を目指してほしい。だから、この学習支援のボランティアのシステムって、とってもいいと思うって。「儀間さん、あんた大学行って宣伝してきなさい！」「ごめん、私にはそんな力ありません（笑)」とか言っているんですけど。学習支援ボランティアに教員養成の人たちや将来教育現場、学校現場に関わりたい、子どもに関わりたいっていう人たちが、単位でもいいし、それ以外でもいいから、この制度があるから南風原にどんどん来て、とにかく体験活動してくださいというのを私たちは感じています。今、教員養成課程の子が一人もいないんです。生涯教育課程の島嶼教育や子ども地域コース、法文、工学の子はいるんですけど、教員養成は一人もいないです。

島　袋：島嶼教育コース、つまり非教員養成課程でやっているんですよ。教育実習の教育実践演習で四年生の授業の際に。それはまさしく地域とのコーディネート力です。これをやるためには、大学の先生が地域の方々とコーディネートして関わりあって、マネージメントする力がないといけない。しかし、大学の先生自体が一国一城の主という意識である以上、大学の先生にコーディネート能力はないわけです。(笑) 生徒にやれと言ったって、その授業を作れる先生がいないから相当四苦八苦。法文学部など教員免許出している学部もあるけど、地域との関わりはほとんどないです。

儀　間：だから学生を個人的にゲットするしかない。学校は教育実習生受け入れのデータを持っていますよね。だから、この子に当たるんです。実際に、教育実習で来る学生に対し大学の空き時間中に学習ボランティアできないかって。学校から情報提供を受けて直で電話するんです、学生に。ヒットする場合があるんですよ。それが一人でもオッケーなんです。

島　袋：そこまでやっているってすごいですね。学生のリクルート。

儀　間：沖縄大学の学生なんですけど、教育実習で来て、毎週何曜日の午前中は空いていますから、学習支援します、と言った子がいて、１年間実際に学習支援したんです。三年生４クラス中心に入って、パソコン、算数、体育。何でも教師のサポートとして入って。この子が本当にやってよかった、と。大学で学んでいるのは、10分１以下だと思いますって。実際に、子どもとのコミュニケーションのとり方、職員室での先生たちの話も聞きますよね。これで、凹むかなと思ったら３月までボランティアして、４月からは北丘小学校で補充教員しています。これが地域の子なんですよ。母校で補充して、採用試験受けたいです、って。こういう子が何名かいます。

教育実習がきっかけで入って、通年で学習ボランティアをして、将来は相談員になりたい、教員になりたいという夢を持って、講師になったり、補充になったり。

新　垣：人事権の反映、採用ができるといいですね。

儀　間：教員がボランティアで関わった大学生を見て、この子を是非入れたいって思うんですよ。

仲　村：補充教員は結構人事権の幅があり、やりやすいです。来年度めぼしい子いますか？とか、是非この子お願いしますと推薦できます。

新　垣：推薦の枠ができればね。

仲　村：評価出しますからね。

島　袋：教員への近道です。

前　城：それでは、今日はありがとうございました。